COBALT-SERIES

前田珠子



天と支なる者

# 緑の糸をたどって

集英社

COBALT-SERIES

天を支える者

# 緑の糸をたどって

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

天を支える者

# 緑の糸をたどって

前田珠子

集英社

# 目　次

天を支える者　緑の糸をたどって
緑の糸をたどって……7
あとがき……192



## ガスカール

ナルレイシアの護衛を命じられた青年公爵。クールな性格で、ことナルレイシアに対して手厳しく、口を開けば毒舌ばかり。

## ナルレイシア

「不幸中の幸いの権化」というありがたくない異名を持つ本好き少女。杜神さまを見きわめる「選定者」でもある！

# 物紹介



## スカルトード

超絶美形の青年にして、とある柱神さまの縁者でもある。ナルレイシアとは「本の虫同盟」の絆で固く結ばれている。

## ウォルセン

良家の子息だが、理由あって家出中。手先の器用さを活かしてなんとか生計を立てている。女装で追っ手をまいているが…？

# 登場人

イラスト／明咲トウル

# 緑の糸をたどって

視界の隅で、手入れされた細く優美な指がすい、と宙を舞う。
油断した。
ほかに言いようのない己が失態に気づいたのは次の瞬間——はらり、と自らの漆黒の髪が切り落とされ、相手の手に落ちたのを目にしたときのことだった。
術者の世界では常識の、だがそうでない世界の住人からは固く閉ざされているはずの秘密を、目の前の青年に暴かれたのだ。
敵意も殺意も、かけらとて感じはしなかった。
だからこそ生じた隙を、しかし相手は見逃すことなく行動を起こしたのだ。
自分の髪を、大切そうに何らかの術がほどこされていると思しき布に包み込む青年の様子からして、相手がこの行為の意味を熟知していることが見て取れる。
(おれとしたことが……)
なんたる迂闊、なんという失態か。
依頼内容の単純さに、本来手放すべきでない警戒心を緩めていた。

結果として、術者にとっては致命的とも呼べる『質』をまんまと取られてしまった。悔いるというより、ほんの寸前までの自分を思いきり罵り倒してやりたい気分だった。

「どういうおつもりで!?」

隙を見せた自分が悪い――わかってはいても、不意打ちで暗器を揮われた不快感は消しようがない。

どうしても不機嫌に傾く声音に、しかし眼前の青年は動じる気配も見せなかった。

悪びれもせず、一見穏やかに見える笑顔で謝罪を口にする。

「失礼。あなたの実力も噂も、よくよく承知してはおりますが、これはわたしにとっても大切なことでしたから……念のために質を取らせていただきました」

その答えに、（やはり）とリーイン・ル・ファンは内心ため息を洩らした。

青年は、自分たち術者にとって、髪がどれほど重要な意味を持つものであるのかを知っているのだ。

偶然――本来であればあり得ない話ではあるが、青年の身の上を考えるとその可能性はないとは言い切れない――知り得た事実を、その意味や重みもわからぬままに振りかざしているのであれば、奪還は難しくはない。

そもそもだまし討ちのように『質』を取るなど、契約破棄の充分な理由になる。

だが、もしも……事情を知っていて、あえてこのような行為に走ったというのなら――短気はそのまま命の危険に結びつく。

見極めなければ、ならない。

「……非常に不愉快な行為です」

不快な気分を隠さない顔で答えれば、「そうでしょうね」と柔らかな笑顔で流される。

その態度だけで充分だった――相手は、すべてをわかった上でやっているのだ。

髪を質に取るという行為の持つ意味だけでなく、そのような真似をした相手に対して、術者がいかなる意識を向けるのかということまでも……それでも敢えて、行動に移したと言うことは、それに対する準備もしくは覚悟があるということ。

手強い、とリーインは思った。

年の頃は十八、九――明らかに自分より半回りは下であろうに、線の細い美貌の青年は、明らかに油断できぬだけのなにがしかを備えているのだ。否、すでに油断したせいで、致命的ともいえる弱みを握られてしまった。

(だが、まだすべてが決まったわけじゃ、ない……)

重大な意味を持つ『質』を手にした青年が、いったいこちらに何を求めてくるのか――それによって、巻き返しは可能だ、と自らに言い聞かせる。

望みの内容如何によっては、従うふりをして裏を掻くことも不可能ではない、と。

契約には言葉が用いられる。言葉には力が宿り、そこには言霊という支配力が生まれる。

だが、皮肉なことに、政治の世界において、言葉は同じように力を持つからこそ、権力に近しい者たちは、直接的なそれを用いない——後に言い逃れるためであるが、それは術者にとっては拘束の弱さしか意味しない。

貴族的なこの目の前の青年が、政治的認識でもって自分に依頼をするのなら——他の解釈が可能な言い回しを考慮された内容であるのであれば……完全に反故にすることはできずとも、半ば以上を無効化することはできる。

リーインはそれを半ば以上期待していたのだが。

しかし。

目の前の相手は、彼の甘い期待に応じてくれるような優しい人物ではなかった。

「家出息子……いや、それは正しくはないか」

首を傾げながら、そんなことをつぶやいた後——。

濃褐色の髪と翡翠の双眸を持つ青年は、リーインの顔を見つめ、はっきりと言い切った。

「一年近く前に、我が家を飛び出した次男坊を見つけ、連れ戻してほしいのですよ」

曖昧と言えば曖昧な依頼内容は、しかしリーインが期待したそれを伴ってはいなかった。

「歳は当時十六でしたから、いまは十七になってますね。緑がかった髪と、緑味の強い榛の瞳で……すらりとした体格をしています。これは――」

そう言って、青年が懐から取り出したのはロケット。

蓋を開けると笑顔の少年が描かれた細密画が現れた。髪と瞳の色からして、問題の捜索人を描いたものに間違いないだろう。

果たして、依頼主は微笑みながら告げた。

「十五の時に描かせたものですが……あまり変わっていないかと思います」

さらに青年は、捜し人の特徴をいくつもあげた。

リーインが、故意に別人を連れてきて、「契約履行」を訴えることのないよう――。

そうして、止めとばかりに、彼が口にしたのは――捜すべき相手の名前、だった。

「……必ず、連れ戻して下さい。彼が思っている以上に……外は危険なのです」

あざといほどの手練と手腕を見せながら、そうつぶやく青年の瞳に浮かぶのは、心底相手を案じる光であったため――断れる状況ではなかったというのが、勿論一番の理由ではあったのだが――苦い思いで息をひとつ洩らした後、「引き受けましょう」と答えたのだった……。



太陽がその姿を世界に顕す以前――。
その光の欠片が世界を満たす夜明け前。
リーイン・ル・ファンは、窓の鎧戸をつつく音に気付き、目を醒ました。
見ていた夢が夢だったため――はっきり言って、不本意この上ない現実であったため、夢で再現されるのは正直うんざりだったのだ――いつもなら殺意さえ覚える安眠の妨害者を、このときの彼は非常に寛大な心持ちで室内に迎え入れた。
訪れたのは白い鳥。
リーインが連絡用に渡したものだった。
その足に、紙が結びつけてある。
細長いそれを、鳥の足からほどき、広げたリーインは目を細めた。
『――聖印――』
とだけ、紙には記されてあった。
「つまり」
くつり、と喉を鳴らしながら、リーインはつぶやいた。
「文字には残せない……それほど重要な内容だってことか」

応えは、返らない。

# 1

ディエーン南西部に位置する街――エアラン。
小さくもないが大きくもないその街で、一二を争う宿屋である『白鷺館』の、最上室の部屋の一室の寝台の上で、現在アゼルフィアは声にならない悲鳴を上げていた。
季節はすでに初夏である。
にも拘わらず、彼女の身体には上質な毛布が何枚も重ねられ、さらには上等な羽毛布団までかけられている。
寝台のそばには、冷たい水と果汁が入った水差しがふたつと、グラスが置かれている。
(あ、あ、あ、暑ーいっっ!)
だらだら、だらだらと流れ落ちる汗は、すでに滝と化している。
用意してもらった手巾はぐっしょりどころかもうびちゃびちゃで、とうに役に立たなくなっており、仕方なくアゼルフィアは額に乗せられた濡れ手ぬぐいで汗を拭うのだが、これもそう

遠くない内に同じ状態になるのは目に見えていた。
「む、蒸れる……」
ほとんど地獄気分である。
なにしろ、今朝、ちょっとくしゃみをした途端、この布団詰めの刑に処せられ……もとい、暖かすぎる寝台に押し込められたのだ。
『大丈夫ですったら！』
という、アゼルフィアの主張はしかし、ナルレイシアによって却下された。
『駄目よ、風邪は引きはじめが肝心なんだから！　油断して放っておいたら、後でどれだけ悔やむことになるか……小雨に降られたくらいだって軽く見て、肺炎一歩手前まで行ったわたしがよーくわかってるわ！　とにかく、風邪を甘く見てはいけないの！　初期完治に尽きるの！　そういうわけだから、今日一日はしっかり寝台で休んでるの！　いいわね!?』
その迫力たるや……すごかった。
自分のことを心配してくれてのことだと思うと、強く『大丈夫ですから』とも言えず、けれど経験上この程度では風邪をひいた内には入らないとわかっていたから、なんとか反論しようとしたところに。
上品で穏やかながら、なかなかどころでなく押しの強い老婦人が加わったのだ。

その時点で、アゼルフィアの敗北は決定したといえる。

『どうしたの!?』

不思議そうに声をかけてきた老婦人――ファティ・リンシャは、ナルレイシアの怒濤の訴えに、もっともだとばかりにうなずいたのだ。

その際、アゼルフィアには口を挟む隙がなかった。

『まあ！　それはナーシアの言う通りね。風邪には充分気をつけるべきだわ。風邪は万病の元と言いますからね。事実、風邪で体力が落ちていたときに負った傷が原因で命を落とした友人を知ってます。わたくしよりも、ずっと年下だったのに……』

そう言われてしまっては、『心配しすぎです！』と言えなくなった。

それで……結局、寝台の住人となることを受け入れてしまったのだが……発汗地獄に落とされた今、彼女の心は後悔でいっぱいだった。

（そりゃあ、風邪引いたときは、とにかくいっぱい汗をかくのが回復への近道だってことは知ってるけど……でも、これはどう考えてもやり過ぎでしょーっ!?　熱冷ます前に熱中症になりそう……。あのひとたちって、実は加減ってものがわかってない……!?）

なんてことを思ってしまう。

「あー、やっぱり限界。どう考えてもこの季節、羽毛布団は凶器でしかないわ！」

がばりと起き上がると、羽毛布団だけを四つに畳んで、隣の寝台に移動させた。

本当は、そのまま着替えてナルレイシアやファティ・リンシャと合流したかったのだけれど、そうはしなかった。

暑いし、具合が悪いわけでもないし、はっきり言って大人しく寝ている方が苦痛なぐらいなのだけれど……それでも、あのふたりが心配してくれた結果だと思うと、その気遣いを無にするような真似はしたくなかったのだ。

幼い頃を神殿で過ごした彼女は、ここ数年ほどは世間にも通じる経験を積んだとは言え――経済的に厳しい環境に置かれた日々は、それなりの辛かったり苦かったり塩辛かったりする出来事を彼女に用意してくれた――基本的には、ひとの善意を疑うことをよしとしない気質の持ち主だった。

もちろん、無条件に誰の言うことでも信じるような世間知らずではなかったが、アゼルフィアにとって、ナルレイシアとファティ・リンシャのふたりは特別なのだ。

何しろ、金髪と黄玉の瞳を持つ美少女であるナルレイシアは、この世界の天と地の間――『空』を支える柱神さまとなるべき存在を見極めるという、世界的にも重大な役目を担うひとであり、もうひとりの銀髪の老婦人は柱神さま本人なのだ！

そんなふたりのことを、どうして疑うことなどできるだろう!?

できるわけがない。

（でも、ふたりともかなり過保護……よね。今回は仕方ないから夕方までは大人しく休んで、それですっかりよくなったってことにするとして、次回からは、くしゃみひとつで大騒ぎされないように、身体が丈夫だってこと印象づけとかないといけないわね。こんなふうに毎度毎度、寝台に押し込められちゃ、ナルレイシアさんにくっついていられないもの）

それは、本当に、困るのだ。

だって、自分は彼女のそばにいて、見届けなければならないことがあるのだから——いや、本当の本音の部分で言うならば、『見届けたいこと』が。

母の遺体を前に、茫然自失した自分を慰め、支えてくれた隣家の老人。

そのひとが、世界を支える柱神さまのひとりだったとは、想像もしなかった。そして、彼が神殿に届けるようにと言い残した、鈍い緑の石を嵌めこまれた銀の腕輪が、柱神の半身である神宝だなんて！

数奇とも言える運命の導きで、神宝『翠唱子』は選定者たるナルレイシアの手元へと運ばれ、自分は……新たなる柱神を見極める彼女の務めを見届ける役目を負った。

（本当に……しっかり治して、でもって体力ももっとつけないと……）

寝台のなかで、アゼルフィアはふう、と息をついた。

彼女の脳裏には、ナルレイシアと出会って以来、巻き込まれたり飛び込まざるを得なくなったりした、さまざまな騒ぎが甦っていた。

犬も歩けば棒に当たる――という言葉があるが、問題の選定者の少女の場合、歩けばもちろんのこと、歩いていなくとも災難が引き寄せられてくるのだ。

当然、『見届け役』として、彼女のそばにはりついている自分は否応なしに騒ぎに巻き込まれることになる。

故郷のセルフィアでナルレイシアたちと出会って、実のところ、まだ十日しか経っていない……というのに。

（わたし、十五年生きてきたけど、一生分の災難を味わった気分だわ）

そう思わずにいられないほどに、トラブル続きの十日間だったのだ。

まず、崖崩れのせいで陸路で目的地のファエンに向かうのが無理だということで、船を借りたはいいのだが、出立日、宿側の手違いで、ナルレイシアの鞄が、別の出発客のそれと――後で見比べてみると、確かに間違っても仕方ないぐらいに似ていたのは確かだが――入れ違っていたのだ。

早々にそのことに気づけたのは、偏にナルレイシアの活字中毒のおかげだった。揺れる馬車のなかだろうが、揺れる船の上だろうが、なんの問題もなく読書に集中できるという脅威の三

半規管の持ち主である金髪の少女は、いそいそと鞄から本を取り出そうとして、鍵が合わない事実を知ったのだ。

普通なら、宿側にそのことを伝え、調べてもらってお終いとなるところなのだが、ここで常に仏頂面を崩さない、黒髪の青年――ガスカールが『不愉快』と顔に書いて、ぼそりととんでもないことを言い出した。

『……生臭い。開けてみた方がいい』

アゼルフィアは、その声を聞いたとき、思わず鼻をひくひくさせて臭いに集中したのだが、生憎全然感じ取れなかった……数ヶ月前まで勤めていたのが食堂だったこともあり、鼻には自信があったから「気のせいじゃ……!?」と、控えめに言ったのだが、なぜか取りあってもらえなかった。

その事実に、結構……かなり、哀しい思いを噛みしめたのだけれど、ガスカールの言葉に従う形で、他人の鞄の鍵を壊して開けることに、一切の躊躇も見せなかった一行の様子に、何だか胸がばくばくした。

(え、と……いくら宿側の手違いでも、それは他人の荷物でしょーっ!? 勝手に鍵まで壊して開けるなんて真似、やっちゃいけないはずでしょーっ!?)

しかし、一行は全然そんなことには構わなかった。

そうして開かれた鞄のなかに収められていたのは――。

薬物で仮死状態にされた、毒蛇四匹だった。

『あー、これ、針の先に少し塗っただけで人が殺せる毒もってるんですよねぇ』

『確か、神経性の毒でしたっけ。呼吸困難に陥るんですよね』

『南方の密林に生息しているやつだからな、こちらでは飼育は難しいはずだが……温室でも用意していたかな!?』

『二番い用意してあるってことは、やはり繁殖用かしらねえ。毒性の強さを考えれば、蛇そのものを寝台に放り込むより、抜き取った毒を有効利用する方が、お得と言えばお得よね……ただ、この蛇はかなり攻撃性が強くて、飼育は難しいはずなのだけれど……!?』

そのあたりのことを、購入者はどう考えているのかしら――!?

等々。

一行の会話は、声音だけを取れば、とてもほのぼののんびりしたものだった。

けれど、内容は――穏やかどころではない。というか、聞いていて、アゼルフィアははっきり言って、背筋が寒くなった。このひとたちと一緒にいて、本当に大丈夫なのだろうかと……思わずにはいられなかった。

（ひと噛みで簡単に人が死んじゃうような毒蛇なのに……そんなのが目の前にいるというの

に、このひとたちってばーっ!?)

どこかが大きくずれているとしか思えなかった。

それでも、アゼルフィアがそれ以上混乱せずにすんだのは、彼らがあっさりと、その鞄の中身のことを、セルフィアの警邏隊に申告してくれたおかげである。

あれこれ不穏なことをさんざん口にしていた一行は、しかしそんなことなどおくびにも出さずに、セルフィアの警邏隊に事件を一任したのである。

これで一件落着かと思ったアゼルフィアだが……甘かった。

次は、川伝いにファエンを目指すために、借りた船に乗って半日の内に騒ぎが起こった。

大雨のせいで流れの速くなった川の波を上手く捉えることが出来ずに、船頭が怪我してしまったのだ。

起き上がることもできないほどの怪我を負った船頭を目の前にし、焦ったのはアゼルフィアだけではな……いはずなのに、なぜか他の四人は余裕だった。

「あらあら、困ったこと」

全然困った様子もなく、そう言ったのはファティ・リンシャで、彼女は次の瞬間歌とも言葉ともつかない不思議な音律を口ずさんだ。

途端に。

荒れていた川の水面は鎮まり、強かった風は穏やかなものに変わり――船はまるで導かれるように、危険な岩や浅瀬を避けて進み始めた。

「さっすが、ファティ・リンシャ！　初めて見ました！」

「先ほどのは、古代音楽都市ウァンテリアンの音律言語ですよね……これは、是非ともご教授願わなくては」

ナルレイシアとスカルトードの台詞から、どうやら柱神であるファティ・リンシャが何らかの力を揮ってくれたらしいことはわかったのだけれど……そういう切り札があるのなら、事前に教えておいてほしかった、とアゼルフィアは切実に思った。

そのときは、それで納得していたのだけれど、後になって、ナルレイシアの「初めて見ました」発言と、スカルトードが心底驚いたような声で「ウァンテリアンの……」云々を洩らしていたことを思い出した彼女は、心底ぞっとしたものだ。

つまり――反応を示さなかったガスカールはもしかしたら知っていたのかもしれないが――あの非常事態において、「誰が」「なにを」「どう」「できるか」を、少なくともスカルトードとナルレイシアは知らなかったのだ！

知らないのに、あんなに落ち着いていたのだ！

（もしかしたら、わたしはとんでもなく恐ろしいひとたちとご一緒してるんじゃないのかしら

ん……!?)

ちらりと浮かんだ考えを、彼女は即座に振り払った。

(いいえ！　考えすぎだわ！)

と。

考えすぎでない場合、導き出される結論が、アゼルフィアにはうっすらと見えており、それはさすがに受け入れたくはなかったのだ。

(なにがあっても「何とかなるだろう」の出たとこ勝負で勝ち抜いてきた人たちと同行するだなんて……そんな恐ろしいこと、自分で選んだなんて、信じたくないーっ！)

そのとき、アゼルフィアは初めて、神宝『翠唱子』の半身選びを見届けるという役目を担ったことに少しばかりの後悔を覚えたのである。

いや、正確にはその役目自体ではなく……見届けるにあたり、そばにくっついていなければならない少女の存在故に、だ。

そして、その思いは今はさらに大きくなっている。

(ファティ・リンシャのおかげで、水霊と風霊が協力して船をこのエアランまで運んでくれたから良かったものの、着いた早々、引ったくりを追っかけて騒ぎを起こすし……うーん、あのひとに付き合ってたら、わたし、確実に寿命がすり減るかも……)

冗談ではなく、そう思う。
そして、はたと気づくのだ。
ナルレイシアが、今朝、自分を寝台に押し込めてから、全然姿を見せていないということに！
（ええっとー、まさか、ナルレイシアさん、どこかに出かけた……とか!?　あんなトラブル体質なのに!?　いえ……いえ、ちょっと落ち着かなきゃ……そう、出かけることは、昨日の夜、確かに聞いたわ……あの、ナルレイシアさんがぶつかったせいで、水たまりに尻餅ついた地味な女性が荷物を忘れて行ったから、それを届けるんだって……）
当然、自分もそのときは一緒に行くつもりで「そうですね、頼まれ仕事なら、届けてあげないと彼女は困ると思います」と同意した覚えがある。
けれど、自分がくしゃみしたせいで、過保護なナルレイシアとファティ・リンシャに寝台に押し込められてしまって……。
だとしたら――もしかしたら!?
（いえ。いえ、いえ、いいえ！　あの尋常でないトラブル体質のことを知ってるガスカールさんやスカルトードさんが、あのひとをひとりで外に出すはずがないわ！　大丈夫……きっと、大丈夫）

半ば以上、自らに言い聞かせるように、「大丈夫なはず」と繰り返していたアゼルフィアは、けれどやっぱり気になって、そろりと寝台から立ち上がった。

スカルトードとガスカールの両名が、宿に残っていることを知り、彼女が「なんでふたりともいるんですかっっ!?」と叫ぶのは、もう少し後のこと。

杞憂という言葉は、ことナルレイシアに関してだけは、まずほとんど当てはまらないという厳しい事実を、なぜか一番、つきあいの浅い彼女が認識しているというのは——何とも皮肉なことだった。

# 2

大きくはないが、決して小さくもない街――エアランにおいて一二を争う格式の高さを誇る高級宿屋『白鷺館』の喫茶室にて、非常に目立つ青年ふたりが、周囲の注目を浴びながら共にティーカップを傾けていた。

ふたりとも、大変目を引く美男子である。

片方は、まさに「神さま!?」と言いたくなるような、人間離れした美貌の主である。緑がかった金髪もつやつやと輝かしく、半ば伏せられた睫毛の長さたるや……楊枝が乗るのではないかというほど。

その奥で輝く灰緑色の瞳は、まるで極上の天鵞絨のような柔らかさをたたえている。

そして、これまた芸術的ともいえる優美な口元には、今は苦笑が浮かんでいた。

「……カール」

テーブルを挟んだ正面で、いらいらとした様子を隠そうともしない年下の友人に、人外の美

貌を誇る青年――スカルトードは、呆れたような声をかけた。

「ヴィル・ダカールのことが心配なのはわかりますが、少しは落ち着きなさい。あまり不穏な空気をまき散らしては、周りに迷惑ですよ!?」

やんわりと窘めるが、苛立ち全開の友人――エルスカーネ公爵ガスカールの態度が改められることはない。

「誰があの猿娘の心配なんぞするか。わたしが不安なのは、あいつの災難吸引器ぶりの方だ。ひとりで放り出して、どんな厄介事を引き寄せるかと思うと……」

仏頂面で答える青年は、その表情のせいで整った顔立ちが台無しだった――つややかな黒髪と極上の紫水晶の双眸、貴族的に整った優雅な美貌はしかし今は、彼が全身から放っている暗黒の気配と相まって、周囲には恐ろしいものとしか認識されないものと成りはてていた。

理由は簡単――実のところ、たったひとつしかない。

それは、ディエーン国王及び当代柱神であるアマンシールから直々に護衛を命じられた少女が、現在単独で、とある男性の元を訪れているせいだ。

傍目には明らかすぎる事情であるというのに、なぜか当事者だけがわかっていない模様に、「いい加減、自覚してもいいでしょうに」と思う反面、「放っておいたらどこまで引きずるんだろう!?」などという意地の悪い好奇心が疼かないでもない複雑な心境もあり、スカルトードは

目下静観の姿勢を貫いている。

とは言っても、目の前の友人のいらいらが昂じた挙げ句、八つ当たりされてはかなわないという保身本能は当然働くわけで、彼はため息混じりにガスカールを落ち着かせるべく言葉を紡ぐことにした。

「……仕方ないじゃありませんか。ファティ・リンシャが仰ったことが事実ならば、わたしはともかく、貴方は絶対にヴィル・ダカールのそばについているわけにはいかないわけですから……それは、理解しているでしょう!?」

ガスカールからの返答はない。

それはつまり、わかっているということだ。

しかし苛立ちを隠せないのは、理性ではわかっていても、感情的には看過できないということで……なぜ、そこまでのことになりながら、自覚が生まれないのか、そちらの方がスカルトードにとっては不思議なほどだ。

（でも、まあ……ファティ・リンシャとアマンシールさま以外、目にも入れてなかった時期が長かったですからねえ。早々に自覚しろと言う方が酷なのかもしれませんが……でも、いいかげん、そろそろ欠片ぐらいは認識してもらいたいところですよねぇ……）

でないと、見ているほうがもどかしい。

相手の方もまた、目の前の友人に輪を掛けて、そちら方面に関しては鈍感となれば尚更だ。

しかし、その相手――ナルレイシアには、非常に有効なスイッチが存在する。

貴重な本の虫同盟の同志として、熱く語り合ったからこそ、スカルトードには見えることがある。

ナルレイシアは……あのとびきりの美少女で、そのくせ今のところは書物を全てに優先させている鈍感で初な少女は。

……実のところ、ロマンティックでドラマティックな展開に、弱い。

そこに不幸な雰囲気などが伴えば、一発で堕ちかねない危うさを持っている。

なんのことはない、それは彼女が生来持つ優しさゆえのものなのだが、あの少女はなまじ最後の最後のところでとてつもない強運に助けられてきたせいで、自身のそういうところには気づいていないきらいがある。

(それを思うと、一年前の事件で、危機一髪のところをカールに助けられたとき、恋に陥ってもおかしくなかったはずなんですけど……そうならなかったのは、やはり出会いが最悪だったから、でしょうかね……カールのせいですね)

いともあっさり非を友人に押しつけて、それでも友人自身、未だ自覚できていない感情にいち早く気づいてしまった身としては、実は結構はらはらしていたりはするのだ。

このまま、厄介な事情が厄介な事件に発展した場合――ナルレイシアが悪運の化身と呼ぶに相応しいことを考えれば、その可能性は限りなく高いと思われる――あの少女は、なにがきっかけで、神宝『翠唱子』が反応を示したという事情ありげな青年に心惹かれるかわからない。

（そんなことにはなってほしくないんですけどねぇ……）

せめて目の前の友人が、こうなる前にそれなりに心理的距離を近づける努力をしていてくれたなら、ここまで不安に思うこともなかったのだが……それは今更言っても仕方ないことである。

（この朴念仁が）

黒髪の、見目は文句なしによろしい友人に、恨みがましい視線を投げかけながら、スカルトードはふう、と息をついた。

ファティ・リンシャから昨日聞かされた、不穏な話を思い出しながら、彼はこわばりつつある眉間を、指でこりこりと解きほぐした――。

時間は昨日の午後に遡る――。

体よくナルレイシアとアゼルフィアのふたりを、茶葉購入の名目で宿から追い出し……もとい、出かけさせた後、スカルトードとガスカールのふたりは、銀髪の老婦人に、事の次第の説明を求めた。

なにしろ、ふたりとも、この時点ではほとんど情報を持っていなかった。

スカルトードは、ナルレイシアが街で見つけた『もしかしたら翠唱子の半身かもしれない人物』を見てもいなかったし、ガスカールは目にこそしたものの、脱兎のごとく逃げられて、ふたりとも事情もなにもわからずにいたのだから。

ただ、目の前の銀髪の柱神の表情を見れば、なんらかの……恐らくは深刻な事態が持ち上がったのだろうことは見て取れる。

一体何事が――と、息を詰めるふたりの青年の目の前で、しかしファティ・リンシャがした行為は、意味不明なものだった。

なにを思ったのか、老婦人は粗末な布の包みを取り出し、その中身を披露したのだ。

現れたのは、どこからどう見ても、上流の女性が身につけるに相応しい……絹糸で編まれた繊細な肩掛けだ。

「これがなにか!?」

訝りも露わに、ガスカールが声を上げた。

スカルトードも思いは同じだったが、ふと、あることに気付き、首を傾げた。
決して明かしたくはないが、七歳まで自らの本当の性別を知らずに過ごしてきた彼は、母や年上の従姉や女性の家人に囲まれて、通常の男性は知らない事情に通じていた。
だから、記憶の片隅に眠っていた知識を引っ張り出すことが可能だったのだ。
「……これ、本来のものからはかけ離れてますけど、もしかしてマンディアル編みでは……!?」
半信半疑ながら、かぎ針や棒針を用いることなく、小さな糸巻きを用いる独特の編み目に気づいた彼がつぶやくと、ファティ・リンシャが「そうなの」とあっさり認めた。
「マン……!?　なんだ、それは!?」
ガスカールだけが、首を傾げていた。
(あー、こういう方面に通じてること打ち明けるのは、さすがにイヤだなぁ)
スカルトードは、何とも言えない複雑な顔になった――それというのも、そもそも『マンディアル編み』に関する知識を得たのが、自分のことを女だと信じていた時代のことだったからである。
人外の美貌に生まれついた男児は、まず例外なく『人間の道を外れた』人生を歩むことになる――などというふざけた『呪い』がいまも生きている家に生まれたせいで、幼少時、自分を

女だと信じて疑っていなかった……などという過去は、やはり明かしたくはないではないか。

七つまで自分の本当の性別を知らず、しかも変態神官によって早すぎる貞操の危機に見舞われたところを大伯父――当時は『大兄さま』と呼んでいたのだが――である美貌の柱神に救われた結果、「わたし、大兄さまのお嫁さんになります！」と叫んだ一件に関しては、是非とも恒久的に封印してしまいたいところだ。

当然のことながら、こんな過去の恥は、ガスカールには話せない。だが、『マンディアル編み』に関わる知識は、まさにその恥ずかしい過去に直接絡んでいるわけで……。

（話したくない！　でも、説明しないことには、カールは絶対に納得しない！）

確信できてしまうだけに、スカルトードは泣きたくなった。

（ああ、どうしたら……）

そう思ったときのことだった。

ファティ・リンシャが救いの手を差し出してくれた。

「東西世界を分断するエルアク大山脈に生きる高地民族のひとつですよ、マンディアル族というのは。遊牧民族で、馬術に優れ、飛び抜けた身体能力を誇ることから、傭兵として諸国に求められた一族です。故郷を離れ、一族同士で争うことも珍しくないことから、戦いで倒れた者を弔うために生み出された編み方がマンディアル編みだと伝えられてますね。氏族毎に特有の

編み目が決められており、その編み目で亡骸の出自を判明できるように……そのように、厳然と決められた編み方だと記憶してます」

ファティ・リンシャの説明に、ガスカールが「そうなんですか」とぼんやりとした顔で答えた。

まだ本筋には気づいていないようだ。

少しだけ呆れたように、ファティ・リンシャが小さな息をついた。

「カール……」

この段に至っても、気づかぬ養い児にファティ・リンシャはふう、と息をつき、処置なしとばかりにかぶりを振ったが、スカルトードは違う考えで、少しだけ見捨てるのを待つことにした。

「カール、あなたは完全な余所事として認識しているようですが、マンディアルの民は、とっくにディエーンに入ってますよ!?　ですよね、ファティ・リンシャ!?」

問い返したところ、老婦人は果たして「ええ」とうなずいた。

ガスカールの紫の双眸が、驚愕に瞠られたのは、その次の瞬間だった。

「それにしても、あの猿娘はどこまで厄介事を引き寄せれば気がすむんだ……!?」

白鷺館の喫茶室――ファティ・リンシャから事情を聞いた翌日の朝、問題の猿娘ことナルレイシアが出かけたのをいいことに、彼女には聞かせられない疑問やら悩みやら愚痴やら愚痴やら愚痴をこぼすために、ガスカールは数少ない本音を洩らせる友人をつきあわせたのである。

目の前には、その友人――スカルトードが座っていた。

呆れたように、声がかけられる。

「カール……彼女のせいなどではないことは、わかっているのでしょう!? なのにそんな言い方をするとは、八つ当たりにしか見えませんよ!?」

見苦しいから止めなさい――言葉は穏やかながら、その内容はかなり容赦に欠けている。

ふたつ年上のこの友人は、極上の顔に極上の笑みを浮かべながら、それでいて遠慮会釈のない言葉をはき出すのを得意としているのだ。

「八つ当たりのひとつぐらいしたくもなる」

むっとして、つい口にしてしまうのは、開き直りとしか言いようのない台詞――わかっていても、本人に当たるわけではなし――目の前にいたら、確実にやるだろうが――結果的にぼやく程度でおさめているのだから勘弁してほしい、とガスカールは思う。

そう……そのぐらいは許されるだろう……そう思わずにはいられない、あまりにあまりな事実が判明したのだから。

あの女装姿の青年の生家のことだ。

マンディアル族とやらのことは知らなかったガスカールだが、現在その一族が名乗っている名前なら、いやというほど聞き覚えがあったのだ。

それは、ディエーン南部に広大な領地を持つ大貴族。

しかも、王家やその縁戚筋にあたる貴族と何度か婚姻を交わしたものの、未だに完全な忠誠が信じられぬという厄介な一族だった。

ふたつ前の王朝時代、当時のディエーン国王に下ったというその一門は、あまりにも大きすぎる力を持っていた。それでも、王家が当時のままであったなら……エルスース家に取って代わられることなく、イルシアス王朝が存続していれば、かの一族がディエーンで問題視されることはなかったかもしれない。

だが、現実は違った。

ディエーンでは、柱神の代替わりとともに、王家の交代劇が起こってしまった。

前のエルスース王朝時代にあっては、かの一族は火薬庫以外の何物でもなかったと聞く。従ったのはイルシアス家であり、その王家を滅ぼしたエルスース家に従ういわれはないとばかり

に、何度も内紛の種をまき散らしたらしいというのだから。

それでも、代々の王が、目障り且つ危険この上ないかの一門を完全に潰そうとしなかったのは……否、できなかったのは、偏にかの一族が持つさまざまな力ゆえだった。

政治、経済、駆け引き、陰謀――あらゆる面に関して、かの一族は飛び抜けた資質を見せたのだと言う。

そうして生き抜き、王家がエルスース家からファラスース家へと、更なる交代をなしたとき、かの一族はそれまでの反抗的な態度を改めた。

新たに立ったファラスース家としては願ってもない展開ではあったのだが、長年のエルスース王家への揺さぶりとも取れるかの一族の干渉行為を知る者たちは、決して安堵できなかった。

そして、それは今も変わらないのだ。

……ため息が、出る。

「よりにもよって、あの一族の者が……新たな柱神の候補、だと……!?」

冗談も大概にしてくれと言う気分で、ガスカールはつぶやいた。

(あんな危険な家から柱神が出てみろ。どんな野心を抱くやつが出てくるか……ああ、頭が痛い)

真面目な話、頭痛がしそうだった。

ディエーン王家にとって危険な権門貴族が、現人神である柱神の加護を得る――。

これほど危険な話はそうそうない。

しかも、その候補を見いだしたのは、すでにディエーンの次代柱神である存在を見極めた実績のあるナルレイシアなのだ。

このことが知れたら、大騒ぎにならないはずがないのだ。

しかも……さらに言うなら、だ。ファティ・リンシャまでもが、不穏な言葉を洩らしている。

現在存命中の柱神における最長老である老婦人は、一年前の騒ぎに関したことで、聞き逃しにできないことを彼らに告げたのだ。

『一年前、カールはわたくしに頼み事をしましたね。そのこと……内容を覚えていますか!?』

問いかけられたガスカールは『もちろんです』と即答した。

忘れられるはずがない。自分が監督……もとい、護衛すべき選定者であるナルレイシアが突然消息を絶ったとき、彼の心臓は早鐘を打ったのだから。

最初はそれは怒りゆえだった――自分の言いつけを守ることを拒んだ彼女の確信犯的失踪だと信じて疑わなかったせいである。

しかし、調べていく内に、そうではなく彼女自身巻き込まれたのだと判明したとき、勿論彼女を守るべき務めを任された者として焦りを覚えはしたものの……同時に胸を襲ったわけのわからぬ鋭角的な痛みに困惑を覚えた。

だが、当時の状況はそんなことに気を取られている暇などないもので、調べに調べたにもかかわらず、最終的に彼女の行方を突き止めることはできなかった。そうして、万策尽きたガスカールは、最後の手段として、ファティ・リンシャを頼ったのだ。

かけがえのない祖母とも母とも慕うひとに、それまで一度として触れたことのない、異能を用いての探索を要請した。

ファティ・リンシャはあっさりとうなずいてくれた。そうして力を揮ってくれた。

まるで、自分の拘りを笑い飛ばすかのように『大切な養い親』であるファティ・リンシャも、『柱神』である彼女も、結局は同一の存在なのだと……どちらかに固執することはないのだと、拘り続けるガスカールに、まるで言い諭すかのように。

そうして、彼女の力をしても、解き明かせぬ謎がロスタロイドの地にあることを、知った。

ガスカールが頼んだのは、行方が知れないナルレイシアのことを、精霊の力を借りて捜してもらうことだった。

しかし、ファティ・リンシャの答えは、明確にして絶対のひとつではなかった。

『あのとき、精霊たちの力を借りてすら、中の様子を覗けない場所が三つあったことを覚えているかしら？』

老婦人の問いに、ガスカールはこくりとうなずいた。

精霊たちの親愛を一身に受けた柱神の望みを退けるほどの障壁など、通常あり得ぬはずのものだ。聞いても尚、どこかで信じられないと……衝撃とともに胸に刻み込まれた一件だった。

『……覚えています……』

ファティ・リンシャの意図がわからず、首を傾げながら応じたガスカールに、彼女はため息まじりに告げたのだ。

『あの後、例の大騒ぎが起こったものだから、それどころではなくなってしまったのだけれど……実は、その際にあれほど大げさなまでに張られていた結界が消えた場所があったのよ。騒ぎの内容が内容だっただけに、わたくしたちの目からさえ隠したい宝物を、余所に移したんだとばかり思っていたのだけれど……もしかしたら』

ふうぅ、と息をついて、ファティ・リンシャはつぶやいた。

『宝物が勝手に逃げ出したという線も考えるべきだったかもしれないわねぇ……』

くすくすと笑う、銀髪の老婦人は非常に楽しげだった。

しかし、ガスカールはちっとも楽しくなかった。

今回の女装青年が、その『逃げた宝物』とやらである可能性が限りなく高いと判断できたせいである。

（するとあれは、あの家の中でも問題に巻き込まれている……ということか？　それなら、本人をこちら側に引き込むのはさほど難しいことではない……？　いや、まて。たとえそうだとしても、向こうの家が大人しく引っ込むとは限らない。その場合、やはり面倒が起こるのは必至というもので……）

問題が解決されるまでに、一悶着どころか二悶着か、下手したら三悶着ぐらい持ち上がりそうな確信を抱いてしまい、ガスカールは深いため息を洩らした。

だから、つい、こぼしてしまうのだ。

「あの疫病神が……」

誰のことを指しているかは――今更である。

スカルトードが呆れたような顔で「また、そんなことを……」と窘めようとするが、聞いてやる義理はない。

「あの猿娘が疫病神でないということを、わたしに納得させられるだけの根拠があるなら聞いてやるが？」

じろりと見遣って尋ねてみれば、見た目ばかりは神々しい青年は、困ったように肩をすくめ

た。

「完全否定はできませんが……彼女のあの類稀な運気と強かさがあればこそ、虹神さま方より選ばれたのではありませんか？」

類稀なる強運と――やはり、類稀なる悪運と。

その両方に愛されているからこそ、彼女は複数の柱神を見極める『選定者』として選ばれた……本人にとっても周囲にとっても、実のところ迷惑以外の何物でもなかったのだが。

「……なら、当人だけにその被害を限定してくれればいいんだ。毎度あの疫病神が騒ぎを起こす度に巻き込まれて迷惑を被るこちらの身になってみろ。まったく忌々しい……」

ぶつくさと文句を口にするガスカールに、スカルトードは一瞬何とも形容しがたい感情をたたえた瞳を向けた後、わざとらしいまでの穏やかさでうなずいた。

「……ですねえ。おまけに本人には、周囲が心配してくちばしを挟まざるを得ない状況というものが全く理解できていないようですから、報われないと言えば報われませんよねえ」

スカルトードの言葉には、素直にうなずけないなにがしかの気配が宿っていた。

「なにを言いたい？」

眉宇をひそめ、問いかけたときのことだ――業あり癖ありの青年が、本気で驚いたように目を瞠った。

「精霊が……ファティ・リンシャに!?　いったい何が……!?」

起こったというのか。

スカルトードの疑問を放り出し、即座にガスカールは席を立った。

向かう先は――養い親の片割れである老婦人の部屋だ。

そうして、息せき切って駆けつけたその場所でガスカールが目にしたのは、呆れた顔で見覚えのある布包みを膝に抱え込んだファティ・リンシャの姿だった。

(あれは確か、問題の女装青年に届けると言って、あの猿娘が今朝大事に胸に抱えて出かけていった包みのはず……)

それがなぜ、いま、ファティ・リンシャの腕の中にあるというのか？

「……なにが、あったんですか!?」

半ば呆然と問いかけたガスカールに、外見も中身の完璧な初老の貴婦人は、ふわりと微笑んであっさりと答えた。

「精霊便よ」

涼しげな顔で答えるファティ・リンシャの右手には、セピア色の絹サテンのリボンがあった。

……確か、災難吸引器のナルレイシアが出かけるに際して、「万が一のときは、これを空に

放ちなさい」とか言って手渡していたものだ。
それが、今、ファティ・リンシャの手元にあるということは――つまり。
（あの猿娘っ！　なんで、たかだか他人の忘れ物を届けるだけのことで、精霊の助けを借りないといけないような厄介な騒ぎに巻き込まれるんだ!?）
ナルレイシア自身が『不幸中の幸いの権化』であり、先日見いだしたばかりの緑の神宝『翠唱子』の半身候補と思しき相手が、女装までして世間の目を眩ませている事情ありな人物であることなどなどを考え合わせれば、責めるには酷な状況と言えないこともなかったのかもしれないが――。
「……なにがあったんですか？」
冷静に聞こえる声を紡いだ自分自身を、少しだけ褒めてやりたい心持ちになったガスカールだった。
が。
返ってきた答えは、そんな彼の心胆を寒からしめるものでしかなかった。
「襲われたみたい」
あっさりと、老婦人は彼の問いに答えた。
「追い詰められた……のかどうかはわからないけれど、川に飛び込むことを余儀なくされたみ

たいね。現在、同行の青年と一緒に仲良く川流れの最中らしいわ」

ファティ・リンシャの声は、どこか暢気だ。

恐らく柱神である自分の好意を得たナルレイシアのことを、精霊たちが粗末に扱うことはないだろうという確信があるからこその余裕だろう。

ガスカールには、そんなものはなかった。

本心を言えば、すぐにでも現場に駆けつけ、川からナルレイシアを引っ張り上げた挙げ句「いい加減にしろ、この馬鹿娘！」と怒鳴りつけてやりたいぐらいだった。

だが、それはもう、できない。

ガスカールの直感が告げていた。

ナルレイシアはすでに、後戻りできないほどに今回の騒ぎに深入りしてしまっている、と。

だとしたら、だ。

今の自分に出来ることは――。

「スカー、頼む」

声で言葉を紡ぐのに、これほど苦労したことはなかったと……思った。

# 3

「げ」

その瞬間。

ナルレイシアは、ファティ・リンシャあたりが耳にしたならまず間違いなく眉宇をひそめたに違いない、淑女どころか妙齢の女性として甚だ相応しくないうめき声を上げていた。

目の前には『ディーシア』と名乗った青年がいる。

会いに行こうとしていた人物だ。

ファティ・リンシャの持つ不思議な力で、相手の住所は調べてあったから、尋ねて話を聞いてもらうつもりだった。

ところが思いも掛けずに街中でその姿を発見し、嬉々として声をかけてみれば……相手はまるで見てはならないものを見てしまったような顔をして、あまりといえばあまりな絶叫をあげた挙げ句、何のかんのと白を切りながら、折を見て脱兎の勢いで逃げ出したのである。

そこで呆然と相手の背中を見送るには、幸か不幸か、ナルレイシアは非常事態というか、あまり尋常でない状況というものに慣れていた。

あっけに取られていたのはほんの数瞬間のこと。

（話を聞いてもらわなくちゃいけないのに、ここで逃げられてたまるものですか！）

そう思ったときには、もう駆け出していた――裾の長いドレスのままで。

自慢ではないが――ならないが――ナルレイシアは実のところ、ドレスで全力疾走することにも慣れていた。

女の子は女の子らしくという故郷であるフィレアの気風と両親の教育方針が一致していたせいで、物心ついてからというもの、動きやすい男の子が着るようなものを与えられたことがなかった。

海で高波に攫われ、大怪我を負ったときこそ、幾分裾の短い服だったとは言え、それ以外の災難に巻き込まれたときは、踵まで隠れるような裾の長いドレス姿だったのだ。

避けられずに巻き込まれ、生死の境を彷徨ったことも五指程度にはあるが、咄嗟に避けて難を逃れたことはそれ以上にあったりした。

つまり、ドレス姿だろうがなんだろうが、危険回避のための反射神経や体力はしっかりきっぱり培われているわけである。そうでなければ、この年齢まで生き残れなかった……というの

は、認めたくはないが認めざるを得ない苦い現実なのだけれど。
だが——まあ、そういうわけで。
逃げた青年を追いかけるのに、ナルレイシアには障害がなかった。
さすがに追いつくまでに多少の時間はかかったものの、あまり運動していないのか、割合たやすく追いつくことが出来た。
厄介な役目の二件目が、ことによってはあっさり片付くかも知れない状況だったため、いつもより身体能力は上がっていたかも知れない。
現に、追いつかれた『ディーシア』は、信じられないと顔に書いて、疑問をそのまま口にしたのだから。
「どうしてドレスで追いつけるんだ……」
と。
ナルレイシアとしては、答えはひとつしかなかったから、当然それを返すことになった。
「慣れてますから」
その答えに、相手は一気に脱力したように見えた。
「……そう」
決して短くはない間が、なにを意味しているのか気にならないわけではなかったけれど、取

りあえずそれはおいておくことにした。

なによりまずは、話を聞いて貰わなければならないのだから！

そうして。

こちらの心臓を射抜くようなことを言われたり、そのせいで動揺したり、あげくに足下に対する注意がおろそかになったり、またまたそのためによろめいて相手に倒れかかることになったり……と。

失態に失態を重ねた事態に、

（ああ、こんな為体ぶりじゃ、話もまともに聞いてもらえっこないーっ！）

と、思ったときのことだった。

ひゅん、と風を切って、なにかが飛来する音を耳のすぐそばで聞いたと思ったのは。

（え!?）

そちらに目をやれば、未だぶるぶると震えている——短めの矢が、石壁の隙間に突き立っていた。

自分がよろめき、体勢を崩さなければ、恐らくはこの身体に刺さっていたに違いない短弓の矢を見つめながら、ナルレイシアは思わず洩らしていた。

「まさか……」

明らかに命を狙ってきた攻撃。
しかし彼女には、そうされても仕方ないだけの恨みを買った相手に心当たりがあったのだ。
それは、一年前のこと――攫われて麻薬で眠らされ、挙げ句に濡れ衣を着せられて殺されそうになった身としては、あれは正当防衛だと主張してもかまわない行為だったと思ってはいるが、結果としてそのせいで実質上、ひとつの公爵家が破滅に追いやられたのである。
恨みを抱いている者がいないとは限らない。
（ナサリエル家の……）
「残党が……!?」
つぶやいた瞬間、隣にいた青年の気配が劇的に変わった。
それまで長閑でさえあった彼を包む空気が、ぴんと張り詰めたものに変わったのだ。
そうして、差し出された――手。
「動ける!?」
問いかけてくる緑味の強い榛の瞳には、強い意志の力が宿っていた。
その力強いまでの瞳の色に圧倒されるように、気づけばナルレイシアはうなずいていた。
「動けます」
「なら、逃げるよ」

「はい」

余計な疑問や言葉を差し挟むことを許さぬ気迫と空気を、ナルレイシアはどこかで感じたような既視感を覚えた。

そうして、覚える確信。

(ああ、やっぱり)

間違いない。

証拠もなにもないのに、確信だけが深まっていく。

手を引かれながら、ナルレイシアは最早疑う余地もなく、傍らの青年の正体を悟っていた。

(このひとは……このひとこそが、神宝『翠唱子』に選ばれた半身に違いない)

そう思うと同時に、胸にこみ上げてきた強すぎる、衝動。

(守らなくては……なにがあっても、このひとを……!)

理屈もなにもない——無条件にただ守りたいと思う衝動……守らずにはいられない心。

それには覚えがあった。

ナルレイシアにとってひとり目の、ディエーンの次代柱神選出の騒ぎにあって、ただひとり我が身の危険さえ忘れさせたのは、正当なる次代となるべき運命を負った少女と、魂で常につながり合っていたその双子の姉だった。

そして、その強すぎる思いに呑み込まれた形で、自分は囚われてしまったのだ。

あのとき、なんとか無事にすんだのは、幾重もの幸運が重なったからに他ならない。つまりは二度目があるという保証はないということだ。

よく、考えなければいけない。

選定者であるということは、もしかしたら記述に残されている以上に厄介な事情を抱え込んでいるのかもしれない。

胸の内に溢れる、『ディーシア』への……真実の名前さえも示してくれない相手への、痛くなるほどの愛しさを覚えながら、ナルレイシアはきつく唇を噛みしめた。

考えた。

青年――『ディーシア』に手を引かれて逃げている間も、ナルレイシアは可能な限り考えはしたのだ。

いま現在、自分たちが置かれている状況というものの原因と解決策を。

（確実とは言えないけれど、問答無用で命を狙われるとなったら、多分わたしが狙われてる可

能性の方が高いわよね……）

女ものの衣装を身に纏い、隠れ住んでいるらしい『ディーシア』からは、そこまでの切迫した空気は感じられなかった。

……だとしたら、非常に先行きが暗い。

（駄目じゃない、わたしったら！　ただでさえ、関わり合いたくないって顔してたディーさんにまとわりついた挙げ句に危険に巻き込んだんじゃ！　こんなんじゃ、絶対、話なんて聞いてもらえっこないわ！）

こんな非常事態に陥る前に、すでに『ディーシア』は彼女の話を聞くつもりがないことを宣言していたのだが、そのあたりのことはあっさりと無視するナルレイシアである。

追い詰められた人間は、相手の意向より自分のそれを優先するものなのである。

とはいえ、話を聞いて貰い、更には受け入れてもらいたいと思っている相手を、こちらの私的な――役目柄背負った因縁だから、そうとも言い切れないのだが――事情に巻き込むというのはさすがに躊躇われた。

（ディーさんの住所ならわかってるし、ここは安全にお帰り願ったほうがいいかも……もしナサリエル公爵家の残党なら、主家没落の元凶であるわたしを殺すためなら、巻き添えが出ようと全然構わないだろうしっ!?）

我ながら、全然嬉しくない予想が立ってしまうあたり……そんなつもりはなくとも、しっかりと修羅場慣れしている現実を目の当たりにするようで、切ない。
だが、そうも言ってはいられない。
（このひとを巻き込んじゃいけない！）
ただその一心で、ナルレイシアは噛みつくようにディーシアに言い放った。
「ディーさん！　これって多分わたしを狙っての襲撃だと思うんです！」
だから、ここでお別れしませんか――!?
と続けるつもりの台詞は、返されたディーシアのそれによって遮られた。
「それで？」
あり得ないほどに、冷静な声で問い返され、逆に慌てたナルレイシアである。
（それで!?　って……そんな、絵に描いたような冷静沈着ぶりで応じる話題じゃないでしょう!?　そんな話じゃないでしょう!?）
困惑が大きくなる。
しかし、そんなナルレイシアの心中など知らぬげに、ディーシアは醒めた目で、落ち着き払った声で、更に問いかけてきた。
「それで、あなたはどんな提案をしようと？」

……気のせいだろうか、その眼差しは、怖くて痛かった。

「い、いえ……だから、そんなわたしとこれ以上一緒にいるより、別れた方が安全なのではないかなぁとか思ったわけで……わたしなら、多分なんとかなると思いますし」

はっきり言って、根拠はない。

ないが、これまで培われてきた『あり得ない偶然及び幸運』と、いま同じ街にファティ・リンシャたちがいるという事実が、彼女にそんな楽天的未来を期待させた。

しかし、当然のことながら、この現実だけを見た場合、そんなものは到底取り上げてもらえるだけの価値など見いだせない代物だった。

「因みにあなた、武術の心得は？」

ありますか――と問われて、馬鹿正直にも「えっと……」と躊躇ってしまう。

「ご、護身術程度なら！」

慌てて答えたものの、その程度の返答は相手の要望には添っていなかったらしく、「それじゃあ、意味がありませんね」と却下された。

「あの、ですね。でも、ですね！　悪運の強さには自信があります！」

ますます自慢にならないことをつい主張したナルレイシアに、青年はかなり呆れたような視線を向けた後、淡々と問いかけてきた。

「あなた、旅行者ですよね？　この街の通路……裏通りまで、全部頭に入ってますか!?」
（一介の旅行者が、目的地でもない通りすがりの街の裏道にまで通じてるはずがないでしょうがぁぁっ!?）
という、ナルレイシアの心の叫びは、余すことなく相手に伝わったようだった。
「やっぱり、却下」
そう言い切って、青年はため息混じりにこう付け足した。
「多少修羅場慣れしてる素人で、しかも地理に不案内な娘さんがどうにかできるような状況じゃないよ、これは。言っておくけど、矢の狙い所といい勢いといい、あれは完全に殺意を孕んでたよ。狙われてるのがあなただとはっきりしたとしても、だからと言って放り出すことはできないよ。あなたってば、見るからに運頼みでこれまで生き延びてきたみたいだもの」
それは、紛れもない事実。
だもので、思わず「うっ」と詰まった。
対する答えは、「やっぱりか……」という、疲れたような声だった。
そうして、継がれ、紡がれた言葉は――。
「いいからさ。ここは取りあえず、あなた、俺に守られてなよ」
それはそれは甘い声で告げられた。

本人に自覚があるのかどうかはわからないが、心までも蕩けそうな空気を纏って告げられた内容に――すぐに理解できなかったことに、彼女は大きな衝撃を受けた。

（うっわ……！　これって、もしかして、危険……？）

なにがどうとはわからないものの、『ディーシア』とこれ以上共にあることの危険性を、はっきりとナルレイシアが自覚した瞬間だった――。

理由を認識できないあたり、差し迫って危険とは言えないかもしれないが……少なくともナルレイシアの心臓が激しく脈打ったことだけは事実だった。

――来るよ

不可聴の声を上げる『友人』の忠告に、うなずいたものの同行者の存在ゆえに、どうしようかとウォルセンは思案した。

物心ついて以来、精霊たちの声が聞こえるおかげで、これまで何度命を拾ってきたかわからない。

だから、彼らの言葉を疑うことなどありえない。

が、しかし。

今回ばかりは、対処に困っていた。

狙われているのが自分なら、さほど大変なことではないのだ。これまでも何度も乗り切ってきたことだし、なにより精霊という力強い味方がいる。本来ならば恐れることも不安に思うこともないはずなのだが……前述した通り、今回に限っては少しばかり様子が違うのだ。

（この子が単に巻き込まれただけだってわかったら、さっさと放り出せるんだけど）

ある意味薄情なことを考えながら、ウォルセンは傍らの少女に目をやる。

豪華な金髪に濁りのない黄玉の双眸を持つ少女は、客観的に見ても、大した美少女である。

しかし、ウォルセンの心が、そのような事実で揺らぐことはない。

はっきり言って、種類は違えども、似たような美貌の主については免疫が出来ているのだ――彼がもし、スカルトードを目にしていたならば、免疫などつけようのない美貌というものがこの世に存在することを痛いまでに認識しただろうが――完全に平静ではあれなくとも、かなりそれに近い状態を保持することはできた。

そう……だから、彼の困惑の原因は、同行者の目立つ容姿ゆえではなかった。

心底困惑させられたのは……彼女にまつわる、奇妙な運の働き具合だったのだ。

「身を低くして――」

短弓における再度の攻撃に備えるように忠告を口にしたその次の瞬間――。

「え!? と……うわぁぁっ!?」

ナルレイシアは、足下の水たまりに足を取られ、見事なまでにバランスを崩した。

そして、その彼女と自分の間を縫うように宙を走った短弓の矢が、背後の建物の壁に突き立った。

絶妙の間としか言いようがなかった。

さすがにそんなことはないだろうと思いながらも、一抹の疑念を抱かずにはいられないウォルセンだった。

(偶然、というには重なりすぎ、だよな……!?)

浮かぶ疑問を、その一言で片付けたいのは……偏に自らの精神衛生上の平安を確保したいからである。

一度目はつまずいて自分に倒れかかってくることで、矢を回避。

二度目は靴紐が緩んでいることに気づいて、全力疾走中に突然立ち止まり、しゃがみ込んだことで、やはり矢を回避。

三度目は今、水たまりに足を取られて……以下同文。

これがすべて偶然の女神の恩寵なのだとしたら、奇しくも同行することになった少女はとん



でもない幸運に愛された存在だということになる。

だが、生憎、そうでない理由を見つけるほうが、容易く納得できてしまう日々を、ウォルセンは送ってきた。

（わざとぎりぎりのところで回避するなんて、相当な手練ってことになる……じゃあ、やっぱり「残党が」発言とか、素人ぶりっこはおれの警戒心を解くための偽装か……!?）

もしもそうなら、これ以上この少女と関わり合いを持つことは危険だった。

無力にしか見えない少女が困っていたから、手を差し伸べたのだ。それが、擬態にすぎないのだとしたら……共に行動するのは危険しか呼び寄せはしない。

（ここは前言撤回してでも、さっさと離れるに越したことはない、かな……!?）

などと、余所事に気を取られつつ、足を運んでいたウォルセンは、不意に柔らかな感触を足に感じたと同時に、「ぎゃあ！」という、女性らしさのかけらもない、心底から痛みを訴える悲鳴を耳にした。

声の主は——同行の少女である。

黄玉の双眸に、溢れんばかりの涙をたたえて、彼女は自らの左足——ウォルセンの右足がつま先に乗ったままのそれ——を見下ろしていた。

「ご、ごめん！　踏んじゃった……!?」

「……じゃってます」
少女は涙声でこくりとうなずいた。
もしかして、ここまでの逃走中に足を挫いたのか――それとも。
「今ので、痛めちゃったとか……!?」
恐る恐る尋ねると、ナルレイシアはふるふるとかぶりを振った。
しかし、涙目では説得力がない。
「……本当に？」
顔を覗きこんで、ことさらゆっくり問いかけると、なにを感じたのか、少女は目を逸らした後、仕方なさそうに答えた。
「……いまので、肉刺が潰れたかな、と……」
（あー、おれが肉刺を踏み潰してしまったのか……）
だとしたら、あの悲鳴も無理はないかもしれない。
とはいえ、応急処置ができるような薬も包帯も持ち合わせていない。なにより、まだ襲撃者たちは諦めた様子はないのだ。のんびりできる状況ではない。
そのことは、彼女も承知しているのだろう、気丈にも「大丈夫ですから」と答えた。
血の気を失った顔色から察するに、潰れた肉刺はひとつではないだろうことが見て取れ、あ

まり大丈夫そうには思えなかったが、ここではなにもできそうにない。
唯一できそうなことと言えば――。
「あー、つま先になにか布でも巻いておく？　少しは違うと思うけど……」
薄い靴下よりは、衝撃を和らげることができるはずだから――と思っての提案に、しかし少女はかぶりを振った。
「いま、靴を脱いだら、絶対二度と履けませんから」
「だけど……」
尚も言い募ろうとすると、黄玉の双眸に気丈な光をたたえて、彼女は告げた。
「平気です。怪我には慣れてますから」
（絶対に嘘だ！）
と、ウォルセンは確信した。
たとえ、怪我することは多くとも、痛みに慣れることはあっても……平気なはずはない。
それでも、この少女の嘘は嫌いではないと思ってしまった。
「でも、全力疾走は無理だよね？」
確認を取ると、渋々といった様子で、彼女はうなずいた。
「でも、命の危険がかかってる状況だから、近い状況では走れると思います。あ、多分、です

けど……以前はそうだったから……」

なにか、とんでもない単語が混じっていたように思うのは……気のせいだろうか!?

ただ、そういうことを馬鹿正直に自己申告してくるという一点で、ウォルセンのナルレイシアに対する不信の大部分は払拭された。

……思うところがないといえば、それは嘘になるのだが。

（肉刺が潰れて悲鳴を上げるあたり、訓練積んだ手練ってわけじゃなさそうだけど……ドレスであれだけ走り回れて、命の危険に晒されるのが初めてじゃないってのは、絶対普通じゃないよな。もしかしたら、この娘、本当に選定者なのかもしれない……）

だとしたら、非常に面倒なことになるのだが——取りあえずいまは、そのことは脇に置いておくことにした。

明日の朝日どころか、今日の夕日を目にするために——いま現在必要なことは、とにかく襲撃者たちから逃げ切ることが第一だったからである。

# 4

（あ、これはまずい）

そう思ったのは、突然逃げ出した『ディーシア』に追いついたときのことだ。

原因は、今回の旅行にあたり、ファティ・リンシャが新調してくれた革靴（かわぐつ）、だったりした。

仕立てのいい革靴ほど長くつきあえるものはない。

とはいえ、それも程度問題だ。

ナルレイシアが履（は）きやすさに主眼を置き、長くつきあってきた靴のほとんどは……彼女が巻き込まれた騒ぎの際、常に履かれていたわけで、かなりけっこうくたびれていた。

それでも、彼女の実家は国外にも知られるなかなかの商社の社主家だ。手入れさえすれば十

年二十年持つ、良い品ではあったのだ。

しかし。

ここで問題となるのは、どの程度の無理――或いは無茶――を強いられたのかということだ。

ナルレイシア愛用の数足の靴はいずれも、どれほど丹念に手入れしたところで、最高の状態には戻しようもないほどに傷んでいた。

その理由は、彼女が巻き込まれた騒ぎのせいだ。

そのことに気づいたファティ・リンシャが、今回、いい機会だとばかりに、ナルレイシアに靴を新調して贈ったのである。

ナルレイシアが遠慮して、断ることがないよう、きっちり理由まで用意して――。

『みんな――各国柱神の面々と思われる――に紹介しろって、やいのやいのと迫られているのよ？　わたくしが贔屓にしている選定者がどんな者か、それこそ好奇心たっぷりで待ちかまえてるに違いないわ。そんなところに、品は良くてもくたびれた靴なんか履いてるナーシアを披露するだなんて、わたくしはイヤよ！』

わたくしの沽券にかかわるわ！　――とまで言われてしまっては、受け取るより他にない。

はき慣れた靴に使われている革以上に上等のそれを使った、非常に丁寧な仕立ての靴は文句

なしに履き心地がよかった。

これからファティ・リンシャに紹介される面々のことを考えれば、ありがたく受け取って履きならすほうがいいに決まっていた。

（まあ、馬車での移動だし……）

と、思ったナルレイシアに罪はない——学習能力の欠如を指摘されることはあっても。

だが、いくら自分がガスカールに『災難吸引器』呼ばわりされるトラブルメーカーであろうとも、現人神たるファティ・リンシャに同行しての旅行中に、まさか新調したばかりの靴が原因で起こる災難に巻き込まれることになるなど、想像もできないではないか！

（履き心地は問題ないし、うん、大丈夫）

そう、自分に言い聞かせながら、新品の靴でロスタロイドを出立したナルレイシアは……いま現在、目的地であるファエンまであと一息という距離にあるエアランの街にて困り果てていたのである。

ファティ・リンシャが用意してくれた靴は、確かに上質なものだった。

だが、明らかにはき慣れていない革靴は、彼女の足に負担をかけた。

ファティ・リンシャが気を回してくれたおかげで、素材が成牛ではなく仔牛の柔らかな革だったのが災いしたのだ。

なんとなれば、だ。

ナルレイシアが躓いたり、転びかけたり、走っている最中に転がっている石を蹴りつけたり――した結果、柔らかな革で保護された彼女の足は肉刺などできなかった代わりに、つま先に……もっと正確に言うなら足の爪に、負担が掛かったのだ。

普段なら、気にもならない程度のものだ。

しかし、ナルレイシアは昨日から引ったくりを追いかけて全力疾走して大立ち回りを演じたり、今日はすでに三度、どう見ても不自然なまでの『偶然』によって――ついでに言えば、かなり無理のある体勢で――危難をやり過ごしていた。

その際の、足にかかる負担は、はっきり言って尋常ではなかった。

つま先がずきずき痛む。明らかに爪に負担がかかっている。

（この分なら、剝がれたり割れたりってことにはなってないと思うけど……）

このまま強行軍を続けたら、遠からず痛めるのは明らかだった。

（うーん、ディーさんがガスカールのことを苦手に思ってるのはわかってるけど、そうも言ってられないか……ここはやっぱり一度『白鷺館』に戻ったほうがいいかも……）

と、そう思った瞬間のこと――。

つま先から背筋に、言葉にならない激痛が走った！

「ぎゃあぁっ！」

思わず口から飛び出したのは、淑女らしくないどころか、人間らしいとも言えない悲鳴。

反射的に瞳からは、ぽろりと涙がこぼれ落ちた。

（痛いーっっ！）

わざとではないのだろうが、しっかりと体重を乗せたディーシアの足が、丁度痛めたナルレイシアのつま先に乗っていた。

この瞬間、確信できた事実が、ひとつ――。

多分、爪にヒビが……入った。

爪に異状があることを隠し、肉刺が潰れたのだと誤魔化したのは、他意あってのことではなかった。

爪にヒビが入ったなどと言って、ディーシアにこれ以上心配をかけたくなかったのもあったし、いま現在の状況なら、痛み具合から言って、あまり変わりがなかったからだ。

ただ、危機感は募る。

「えーっと、ここから『白鷺館』へって、どう戻ればいいか、ディーさんわかります？」
尋ねると、ディーシアはイヤそうに顔をしかめた。
「……遠いよ？」
答えるまでに一瞬の間があったのは……どんな意味合いを孕んでいるのだろうか。
「でも、このままじゃこっちの足が駄目になります。宿に戻りさえすれば、手当ても受けられますし、いけ好かないやつですけど、腕は確かな連れとも合流できます……なにより、ファティ・リンシャを慕う精霊たちが守ってくれます」
さりげなさを装って、極秘事項を口にしたのは、ナルレイシアのなかで、ディーシアが『翠唱子』の半身であることが既に確定していたためだ。
「……精霊たちが……？」
半信半疑といった口調で問い返してくるディーシアの双眸を正面から見返し、ナルレイシアは「はい」とうなずいた。
「あの方は、精霊たちから尋常ならざる親愛の情を捧げられている御方ですから……あなたと同じように」
精霊が人間に親愛の情を示すことは珍しいが、さりとて稀有なわけではない。
彼らは自分たちの気配を感じてくれるというだけで、嬉しくて好意を抱くという単純な気質

を持っている。
だから、ナルレイシアの探りは深入りしない程度のものだった。
だが、それすらも相手にとっては禁忌であったらしい。
「……意味がわからないな」
あっさりと言い切られ、半ば予想はついていたこととは言え、少しだけ淋しくなった。
ナルレイシアの目には——正確に表現すれば、彼女の第三の視界にあっては、あくまで空とぼけるディーシアの周囲には、最初に見たときと変わらぬ、きらきらと輝かしい光の飛沫が舞い溢れており、それはこれまで出会った柱神を包むそれとどこまでも似ていたのだ。
神宝『翠唱子』は、間違いなく彼——ディーシアを選んでいる。
そう確信できるのに、当のディーシアが安定していない……。
(これじゃあ、まだ話は聞いて貰えそうにないなぁ……)
がっかりしたのは確かだったが、希望がないではないとナルレイシアは自分を慰めた。
(だって、このひと精霊の加護とか親愛とか、無関心な風を装ってるけど、決して信じてないって感じじゃないんだもの)
『精霊の加護がありますように』
『精霊たちの好意を受けられますように』

それは、世界中の誰もが口にする決まり文句だ。
けれど、本当にその言葉の示すことを信じ、希う者は多くはない。
神々や精霊の存在を疑うことはなくとも、彼らの存在を身近に感じる者は限られるのだ。そうした感覚を持ち得るのは、実際にその息吹を身近に感じる資質を持つ者か、そうしたひとのそばにいる者か、だ。
そして、恐らくディーシアは前者だ。
とぼけてはいるが、精霊という言葉に対する反応が、普通の人間と明らかに違うのだから。
（……まあ、わたしの場合、異能者を見分けるきらきら光があったから、そうとわかったんだけどね）
そうでなければ、多分見極めることは難しかったろう――それぐらい、ディーシアの示した素っ気なさは自然だった。
（んー、でも、早いとこファティ・リンシャたちと合流しないと、わたしの足が本格的にまずくなりそうなのよね）
しかし、ディーシアの言によれば、『白鷺館』は遠いという。
ナルレイシアはそっと、懐を押さえた。
朝、出かける前に、ファティ・リンシャからこっそりと、小遣い兼危急金を手渡されていた

ことを思い出したのだ。

『ナーシアの場合、往復四半時ですむ買い物でも、騒ぎの種を拾わずにはいられないようですからね、用心のため、持って行きなさい』

と、ほとんど無理矢理持たされたものだ。

その時は、ファティ・リンシャまで自分を災難吸引器扱いするのかと、哀しいやら切ないやら憤ろしいやらと複雑な思いを味わわされたのだけれど――。

今となっては感謝するよりない。

(ありがとうございます、ファティ・リンシャ！　でも、やっぱりちょっと切ないです)

などと思いながら、ナルレイシアはディーシアに問いかける。

「ディーさん！　この近くで馬車が拾える通りをご存知ですか!?」

あったらさっさとそこに行き、馬車で(ディーシアごと)宿に戻るに限る――と思っての彼女の問いに、しかし返された答えはあまり芳しいものではなかった。

「あるけど……馬車で戻るつもりなら、この近辺で乗り込むのは賛成できないかな。ここから白鷺館に向かうとすると、途中に二三か所、馬車専用の路地を通ることになるから……狙われる心当たりがあるなら、間違いなくそこで襲われると思うからお奨めできないかな、と」

ディーシアの言葉に、「それじゃあ、意味がないじゃない！」とナルレイシアは声にならな

い叫びを上げた。
「え、と……じゃあ、人通りの多い道で、馬車が白鷺館までたどり着けそうで、でもってこの近辺で馬車をつかまえられそうな場所……とか。ご存知ありませんか？」
自分で言いながら、（そんな都合のいい場所なんて、ないでしょう!?）とナルレイシアは思った。
あまりにも条件が厳しすぎる。
しかし、意外にもディーシアはあまり緊張した様子もなく、こう、答えたのである。
「橋を渡らなければならないから、少々距離はあるけれど……それでいいなら、条件に見合う馬車の乗り合い所はあるよ」
と。
（橋のむこう!?　ってか、橋ってどこよ!?）
思ったけれど、他に道はない。
もう一度、ナルレイシアは懐をぎゅっと押さえた。
そこには、ファティ・リンシャから渡された金子（きんす）の他に、もうひとつ――どうにも最後だと思ったときに使いなさいと、渡された品があった。
ナルレイシアにとっては、最後の最後の命綱（いのちづな）でありお守りだ。

（まだ、大丈夫！）

自身に言い聞かせながら、彼女はディーシアを振り返った。

「じゃあ、そこに案内してください！」

足の爪のひびが、決定的な打撃を受けて割れてしまうまでに――なんとしても馬車に乗らなければならない。

（いいえ！　この際、乗り込んだ瞬間に爪が剝がれたっていいわ！）

生爪がはがれる際の激痛をすでに知るナルレイシアとしては、とんでもない痛みを覚悟した上での決断だった。

だが、それでも――ここで、命を散らすわけにはいかないのだ。

自分も、ディーシアも。

（だったら――！）

つま先から伝わってくる、鈍いのか強烈なのか判別に困る痛みにかかずらわっている場合ではない。

「……ナサリエル公爵家の残党なんかに、負けてたまるものですか……っ！」

そう叫んだ瞬間、一緒にいた栗色の髪の青年が驚きに目を瞠ったのだが――生き残るべし、と自らに誓うことに夢中になっていたナルレイシアは気づかなかった。

「善は急げと言います、ここはさくさく行きましょう！」

きりりと言い切り、ナルレイシアは足を踏み出した――刹那、イヤでも思い出されたつま先の痛みに、一瞬だけ顔を顰めたものの、彼女は気丈にも歩を進めた……とは言え、ディーシアが案内してくれないことには馬車を拾える通りにもたどり着けないわけだが。

そのあたりのことは、彼女の熱く燃える決意の前では些末事として処理された模様である。

そんなナルレイシアの迫力に気圧されたのか、「ああ、うん」とうなずいたディーシアが、さりげなく彼女の腕を取りながら、こう問いかけてきた。

「それは賛成なんだけど……足の方は大丈夫？」

実のところ、全然大丈夫ではなかった――しかし、この場面で正直にそう言えるものではない……というか、言ったところでどうにもなりはしない。

「……根性と気合いで、大丈夫にします」

ナルレイシアの答えに、隣を歩いている青年はなんとも切なげな息を洩らした。

「ちっとも大丈夫そうじゃないから、無理はさせたくないんだけどね……」

そう、ぽつりとつぶやいた後――。

ぐい、とナルレイシアの肩を抱く指に力をこめた。

「ごめん、走るよ――追いつかれたみたいだ」

「はい！」

ナルレイシアはうなずいた。

ここで足に無理をかけたら、どんな事態が待っているのか――想像できないわけではなかったが、躊躇（ためら）うには、背後から叩きつけられる殺気が強すぎた。

命を拾うためにも、いまは走るしかなかった。

# 5

（この娘には悪いことしちゃったな）

罪悪感を覚えながら、ディーシアことウォルセンは金髪の少女の肩を抱きながら、川向こうを目指していた。

エアランの街中には、いくつかの川が流れ、橋も数多く存在するのだが、彼が向かおうとしているそれは、この街最大のものといって差し支えないものだった。

そして、その橋の存在は――橋でしか繋げられていない川の向こう側とこちら側との、残酷なまでの境目を示す象徴でもあった。

いわゆる富裕層の住民が住む区画と、貧困層の住民が住むそれとの。

ウォルセンが部屋を借り、活動している場所は橋の『こちら側』に限られている。昨日こそ、橋の『あちら側』に足を踏み入れたものの、それはほんの偶々のことで、請け負っていた仕事の内容が『貴族のお嬢さんが身につけてもおかしくない品』だったからだ。

そうした品は、工房の親方自身が見極めをつけるため、仕上がった品を持ち込まねばならないという、ちょっと面倒な段取りが組まれるわけで——実のところ、ウォルセンは昨日、親方の眼鏡にかなうかどうかを試すことも兼ねて、編み上がったばかりの肩掛けを工房に持参するところだったのだ。

橋の向こうは生活圏外——当然、一通りの地理には通じていたが、通暁しているとは言い難い。

だが、同行の少女を無事に『白鷺館』に送り届けるためには、どうしても橋を渡る必要があった。彼女が狙われている可能性がある以上、こんなところで放り出すわけにはいかない。

だが、面倒を見るのはそこまでだ。

(この娘はすっかり自分が狙われてるんだって思いこんでるようだけど……なぁんか、首筋のあたりがちくちくするんだよな)

こうした感覚は、これまでも何度も味わい、助けられてきたものだ。

一瞬だけですむときもあれば、持続する場合もある。確かなのは、この感覚が消えない限り、安全ではないということだ。

ナルレイシアと自分——どちらが狙われているのかはまだはっきりしないが、早々に彼女と別れなければならないのは確か。

もしも、彼女が狙われているのなら、足を痛めていることを思えば、宿までついていくべきかもしれないが……さすがにそこまでは、面倒を見きれない。

何しろ、彼女の連れというか、一行が宿泊している『白鷺館』には、ウォルセンがなにがあっても絶対に顔を合わせたくない、言葉を交わすなど言語道断だと思い極めている人物が待っているのだ。

エルスカーネ公爵ガスカールは、複雑な出生にも拘わらず、ディエーン王家に近しい立場にある人物だ。

王家とあまり折り合いのよろしくないウォルセンの実家――家出中だが――にとっては、あまり好意的につきあえない人物のリストの上位に位置している。

家を嫌って飛び出したわけではないウォルセンとしては、やはり極力お近づきになりたくない相手なのだ……何の運命の皮肉か、その連れである少女と共にいま現在、逃避行の真っ最中ではあるものの。

（おれとの追い駆けっこのせいで肉刺作ったあげく、わざとじゃないけどおれが肉刺潰しちゃって、この娘には本当に悪いとは思うんだけど……適当な馬車つかまえたら、速攻で押し込んでさよならするのが一番だよな）

恐らくナルレイシアは「是非一緒に！」とか抵抗するだろうが、そこは非情に徹して「これ

以上巻き込まれるのはご免です！」とでも叫べば、人の良さは確認済みの少女のこと、自分の主張を引っ込めるに違いない。

（なにがなんでもって勢いでしがみつかれても、いまの足の状態なら、振り切って逃げ切るのも難しくはないだろうし……）

さりげなく非道な選択肢も用意しているウォルセンだった。

ただし、しっかり橋の向こうで、ナルレイシアを馬車に乗せて『白鷺館』に送り届ける覚悟はあった。

だから、気遣いながら足を進めていたのだが――。

あとひとつ、角を曲がれば件の橋が見えるという段になって、ウォルセンは不意に、違和感を覚えた。

（……なんだ……？）

なにがなんだとはわからない。

だが、確かに何かが違うことだけはわかってしまう空気の変化に、彼は困惑と焦りを覚えた――うなじに走る違和感が、ますます大きくなったのだ。

「……あなた？」

先ほど、ドレス姿にも拘わらず見事な疾走ぶりを見せた少女に問いかけてはみるが、相手は

ぜいぜい荒い息を吐いている。
（違うか……じゃあ、この何とも言えない、気持ちの悪い感じの元凶は……？）
どこだ？
どこから、放たれている？
肩で息をついている少女を休ませながら、ウォルセンは意識を集中し、周囲の気配という気配を拾い上げようとした。
それは、彼にとっては息をするのと同じほどにたやすいことだった。
精霊の気配や息吹を感じ取れることだけを、周囲の者のほとんどは、ウォルセンの異能の性質だと思っているが、実は彼の能力はそんなところでは留まらない。
彼は、その気になりさえすれば、一度なりとも見知った者の気配とその放つ空気の種類を個別に認識できるのだ。
殺気や害意に反応する者は珍しくないだろう。
また、知己の気配に敏感な者も、数多く存在する。
だが、ウォルセンは知己に限定してとはいえ、その者自身は勿論、その命を受けた者達の存在を通して、『接触したそのとき』の彼らの心境を読み取れてしまうのだ。
ただ、その能力は傍目には単なる「空気を読み取る目」、もしくは「気配を感じ取る敏感さ」

としか受け止められていなかったから、特別なものだとは思われていなかったのだ。
本人自身、自らが持つ資質が、特に周囲に取りざたされるようなものだとは自覚していないものだから尚更だった。
だが、いま。
渡るべき橋の向こうに、ウォルセンは明らかに異質ななにかを感じ取っていた。
(害意……は、取りあえず感じられない。なら、大丈夫かな？　なんにしたって、この娘を放って行くわけにはいかないんだし……ああ、ただ、なんだろう？　妙に気に掛かるというか……気分が悪いというか……まるで……)
そのとき、ウォルセンの思考が何らかの答えを出していたら、もしかしたら未来は違っていたのかも知れない。
だが、このときのウォルセンに迫ったのは、熟考を許す穏やかな時間ではなく、即決を促す危険な気配を放つ集団の気配だった。
よりにもよって、件の橋に向かってナルレイシアを支えながら走り出し、丁度橋の真ん中付近まで足を進めたときのことだった。
慣れ親しむほどに、馴染んでしまった気配であったからこそ、それを感じた瞬間、ウォルセンは身を強ばらせた。

（なんで!?）

呆然と、目を瞠った。

（なんで……なぜ、この気配に精霊たちは警告を発しなかったんだ……!?）

これまで、最もこの気配を放つ者たちによって、自分が命の危険に晒されてきたことを、精霊たちが知らないはずがないというのに!?

（どうして……!?）

茫然自失するウォルセンに、声が掛けられる。

「ディーさん？」

ナルレイシアだ。

だが、あまりにも想定外の事実ゆえに、動揺した彼は満足に答えを返すことができなかった。

「ディーさん!?」

橋の真ん中で立ちつくしてしまったウォルセンに、少女が焦ったように声をかける。

だが、それでも——ウォルセンは動けなかった。

先ほどまで、確かに自分に警告を与えてくれていた精霊たちが、橋向こうに存在する者たちのことを、一言たりとも伝えてこなかったという事実故に。

その後の——しばらくのことは、情けないことに、覚えていなかった。
ウォルセンがはっと我に返ったのは、ナルレイシアに右腕を抱えこまれたときのこと。
突然、何事——と思った彼に、金髪の少女はごくごく真面目な顔をして……とんでもなく的外れな質問をぶつけてきた。
「ええっと、ディーさん。この川ってば、かなり幅広いですけど、水深はどうでしょう？　ここから飛び込んで、川底で頭打って昇天ってことにはなりませんか!?」
あまりにも意外すぎる質問に、ウォルセンは呆気に取られた。
事前の記憶がないにしても、これは突飛すぎると思ったのだ。
が、妙なところで律儀な彼は、思わず誠実にナルレイシアの質問に答えてしまった。
「よく街の子供たちが度胸試しと称して橋から飛び込んでるし……今は特に数日前の雨のせいで増水してるから……その心配はいらないと思うけど……」
でも、それがなにか——？
と、問い返す余裕は、ウォルセンに与えられなかった。
「そうですか、よかったーっ！」
嬉しそうににぱっと笑ったナルレイシアが突然、彼が持っていた——先ほど「忘れ物です」と言って渡された——肩掛けの包みを強奪したのである。

「え、ちょ……!?」

ウォルセンは慌てた——当然である。

この追い駆けっこもあり、彼はひしひしと『河岸変え』の必要性を感じていた。そうして、その際どうしても必要な路銀を調達するためには、どんな手妻を用いたかは知らないが、綺麗に染み抜きがなったという夏用肩掛けは手放せない収入源だった。

それを奪われては堪らない。

「返せ！」

思わず叫び、ナルレイシアから奪い返そうとしたのだが、意外な彼女の早業にそれはかなわなかった。

「また水浸しにするよりはましでしょう!?」

（へ？）

そんな場合ではないというのに、不覚にもウォルセンは投げかけられた問いに間抜け面を晒した。

（……水浸し……？）

少女がなにを言っているのか、全く理解できずに言葉を失う。

その、時間にして数瞬の沈黙が、ウォルセンの決定的敗因となった。

「これはっ！　絶対安全な場所に避難させますからっっ！」

こちらに理解させるつもりなど皆無としか思えない言葉を口にしながら、少女は懐からセピア色の艶やかなリボンを取り出し、問題の包みに結びつけた。

意味不明の行為である。

だが、その瞬間、ウォルセンは全身に巡る血がざわり、と騒いだのを感じ取った。

少女はなにかをする気なのだ――それは確信だった。

そして、それは恐らく、ウォルセンにとってはありがたくない結果をもたらすだろうことであろうとも予測がついた。

「ばっっ！　止せ……っっ！」

叫びながら、必死に彼女から荷物を取り返そうとしたのだが――驚いたり呆気に取られてしまったほんの数瞬に、ことは起こってしまった。

いや、この場合してやられたと言うべきだろうか。

金色の髪を、風変わりな形に整えた少女は、ウォルセンの制止など耳に入っていない様子で、次の瞬間、大事な包み――セピア色の絹リボンつき――を、ぽーんと空高く放り投げてくれたのである！

「風霊、お願い！　ファティ・リンシャに！　あ、くれぐれも扱いは丁寧にね！」

その言葉に呼応して、一陣の風が舞ったかと思うと、リボン付きの包みは、くるくると円を描きながら、上空を渡る風に乗って見る見る遠ざかって行った。

（持ち主の意向ぐらい、聞けーっっ！）

と、ウォルセンは叫びたかった。

だが……今更だった。諦めるより他にない。

（……百歩譲って、あれを落としたり踏みにじる羽目にならずにすんだのは……まあ、よしとしよう）

手元に戻るかどうかは別として、件の肩掛けはそれなりに精魂を込めて編み上げた力作だったのだ。悲惨な運命に見舞われずにすんだだけでもよしとすべきかもしれない。

（ああ、でも……この分じゃ、回収は絶対むりだな）

ナルレイシアは好意で肩掛けを安全な場所に避難させてくれたつもりなのかもしれないが、生憎、そこにウォルセンは引き取りには行けないのだ。

彼女が口にした『ファティ・リンシャ』自身には、彼も好意を抱いてはいたが、同時に油断ならない相手であるという印象もしっかり持っている。さらには、ウォルセンの実家にとってはかなり危険な存在と言えるエルスカーネ公爵ガスカールが後ろに控えているのだ。

腹芸に長けている幼なじみならともかく、そういった方面がはっきり言って苦手な自分が近

付くのは危険すぎるというものだ。

結局のところ――と、ウォルセンは自身に言い聞かせるしかなかった。

（ああ、やっぱり関わるんじゃなかった！　でもっ！　この危機を乗り切ったら、なにがなんでもさっさとエアランを出るっっ！　出てやるっ！　家賃未払いとか違約金とかの件は、もう後で考えるっっ！　それなら、まだ大丈夫な筈だ！）

と――。

かなり自棄になっているウォルセンである……が、その自覚はなかった。

しかし――しかしである。

彼に取り憑いた疫病神……もとい、ナルレイシアの選択は彼の理解と想像力の限界を遙かに超えた代物だったのだ！

「これで心配事はなくなりましたし、どうも新手も現れちゃったみたいだし、ディーさんから聞いた限り、飛び込んだ挙げ句川底で頭が砕けて間抜けな死に様をさらすようなこともなさそうですから……ここは一発、攻めていきましょう！」

と。

いきなり意味不明なことを言い出したナルレイシアは、相も変わらずひとの話を聞く姿勢すら見せることなく、突然ウォルセンの腕を抱え込んだかと思うと、「えい！」と声を上げて橋

の上から川面に飛び込んだのである！

咄嗟のことに、身体のバランスをとることもできなかったウォルセンの身体が宙に舞う。

「ぎゃあぁぁっ！　こんの疫病神ーっっ！」

呪うかの如き叫びが街中に響き渡った次の瞬間――。

派手な水柱が、エアラン第一の川の水面に立ったのである。

# 6

『ディー』

その声は、あまりにも耳に馴染みすぎていたがゆえに、集中していたウォルセンの意識を惹くことはなかった。

黙々と、ウォルセンは書物の世界に耽溺していた。

『ディー……』

少し、響きの違う、同じ声が彼を呼ぶ。

意識の一部で、ちり、と小さな警鐘が鳴った。

だが、さしかかっている場面は魅力的すぎて、思わずウォルセンは呼びかけではなく本の世界を選んでしまった。

そうして――。

『――ねえ、ディー……？』

穏やかで柔らかで――そのくせひやりとしたものを感じさせる声で呼びかけられたとき、彼は己が失敗を悟った。

慌てて書物から目を上げて、声の主の顔を見る。

寝台に横たわったまま、親友であるひとつ年上の少年は、にこやかな仮面の下に、明らかな苛立ちと怒りをたたえた表情で、ウォルセンを見つめていた。

『あ、ごめん、アッシュ。目、醒めてたんだ？』

栞を挟む間も惜しみ、本を脇において答えた彼に、床の住人である親友は『うん』とうなずいた。

『かれこれ、一刻ぐらいにはなるかな』

普段は優しい幼なじみの親友は、しかし体調を崩したときに限って、少しわがままになる癖を持っている。

苦しくきつい思いにさらされているとき、わがままという形の甘えを示しているのだとも言える。

アッシュがそんな態度を取るのは、数人に限られたことであるから、そのひとりに選ばれたウォルセンは無条件に嬉しいと思っているわけだが……どうも、相手の意識がない間、暇つぶしに読書に勤しむというのは、あまりよろしくないらしい。

（アッシュが目覚めるまで……）

と思って読み始めた書物に夢中になりすぎて、彼の覚醒に気づかず読み耽るという失態を犯したのは、実にこれで三度目になるのだ。

『……ごめん』

悄然として項垂れる彼に、『謝るようなことじゃないだろう？』と、笑いかけてくる親友の翡翠の双眸は、しかし全然笑っていない。

（……笑いながら、アッシュってば怒ってるし……）

これは、早急に対処すべき問題だろう。

しかし、ならなにをもって暇……もとい、時間を有効利用すればいいというのか。

目覚めたアッシュの額に光る汗に気づいて、近くに置いてある手巾に手をのばしかけたウォルセンはあることを思いついた。

アッシュが寝込んだ際、汗拭きに用いられる手巾は使い捨て扱いされるのだ。

経済的に厳しい生家にあっては考えられない無駄遣いだと、常々ウォルセンは考えていたのだが、伝統だの家風だのと言われては反論しようがない。

一応同じ一族に生まれたとは言え、本家からは遠い傍流も傍流の貧乏一家に生まれ育ったウォルセンの認識と、大貴族である本家のそれが重なるわけがないのだから。

だが、同じ使い捨てされるにしても、見事な縫い目を披露する熟練者の作品と、素人のそれとでは『勿体なさ』が少しは減じるのではないか——と思ったのだ。

幸い、すぐ本に没頭してしまう自分ひとりには任せられないと、アッシュの寝室には常に彼の母親や侍女が詰めている。その折、侍女はともかく、当家の女主であるひとは、裁縫道具を持ち込んでは、縫い物や刺繍や編み物に勤しむことも多い。

男であるウォルセンには、謎の魔法としか思えない手法だが、それが大切なアッシュの汗を拭いたり肌着に変身するさまには興味を惹かれた。

間違っても、他の誰かのために縫い物を覚えようなどとは思わない。けれど、アッシュのためなら——病弱で、寝込んで苦しむことも少なくない彼の助けになるのならば、汗を拭く手巾ぐらいは用意してあげたい。

『……小母さまに頼んで、縫い物を教えて貰おうかな……』

ぽつりと洩らした一言に、はたしてアッシュは意外そうな顔で問い返してきた。

『なんの気まぐれだ？』

『んー、だってね？　アッシュの汗拭きに使った手巾ってば、一回きりの使い捨てなんだよ？　勿体ないなー、と常々思ってたし……同じ使い捨てなら、習い初めのおれが作ったやつでも一緒でしょ？　有能な技術者を、無駄な部分に宛がうのはどう考えても損だと思って……』

正真正銘の本音だったが、どうやら言い方を間違ったらしい。
アッシュが、明らかに機嫌を損ねた顔で睨みつけてきた。
『つまり、無駄に寝込むわたしの汗拭きの手巾を作るのは、大いなる無駄な行為だと、そういうわけ……』
『そんなわけがないじゃない！』
アッシュの拗ねた物言いに、しかしウォルセンは本気の本音で叫び返していた。
『苦しんでるアッシュの姿、見てるのおれだって辛いんだよ!? ちょっとでも助けになれることはないかって、いつだって思ってるんだ。でも、おれにできることなんてなかったし……黙って見てるだけってのが殊更辛くて……だから、見ないで済むように本を持ち込むようになったんだけど、それだと夢中になりすぎて、アッシュが起きても気づけなくて、アッシュも不機嫌になっちゃうし……それでふっと思いついたことじゃあるけど、単なる気まぐれなんかじゃなくて、アッシュのためにできるかもしれないことだって……確かに、今更なのかもしれないけど……でも……』
激した感情のままに言い募るウォルセンの緑がかった栗色の髪をくしゃくしゃに乱しながら、寝台からまだ起き上がれずにいるアッシュは呆れたように告げた。
『……仕方ないから、お前の手縫いの手巾なら、ひどい縫い目でも三枚目までは我慢

しよう。だが、あくまで三枚目までだ。あとは……そうだな、使い捨てが勿体ないというのなら、勿体なくて一回きりで捨てられないような意匠の染めか刺繍を施すんだな。わたしが見とれるぐらい見事な出来栄えなら、何度か繰り返し使ってもいいかな』

病床についたままの少年の傲慢な言葉に、ウォルセンはひくりと口元を引きつらせた。

『小母さまに習おうかって、まだはっきり決めてもいないのに、なんでそこまで段取りを組むんだよ!?』

『そんなの、楽しみだからに決まってるだろう!?』

輝くような笑顔で答えられ、ウォルセンは目を丸くした。

『……アッシュ？』

『楽しみじゃないはずがないじゃないか、君が……ディーがわたしのために、手ずからなにかを拵えてくれるというんだもの』

臆面もなく告げられた言葉に、ウォルセンは耳まで真っ赤に染めた。

『たかが手巾ぐらいで……お前、恥ずかしすぎる……』

『そう？　でも、どうせならいずれはディーのお手製の肌着を身につけたいかな？　あと、襟巻きとか手袋とかも、ディーが編んでくれたら嬉しいかなぁ……』

『お前……！　おれはまだ縫い方さえ知らないのに、編み物まで覚えさせる気か!?』

『気が向いたらでいいから』
『気なんて向くか！』
『はは』
『笑うな！』
多大な注文を押しつけられたことで、ウォルセンが怒りまくって終わりにした会話だったというのに――結果的には、結局アッシュの全勝ちになった。
ウォルセンはアッシュの母親である当主夫人に師事したあげく、『無理だ、無茶だ』と思っていた技術を習得してしまい、あげくにアッシュの肌着を任されるぐらいに腕を上げてしまったのだ。

――一瞬、意識が飛んだらしい。
突然腕を取られ、全体重をかけられて橋から川に放り出され――あまりにも想像外の事態に、意識を失ったものと思われる。
（わー、びっくりした）

いまだばくばくと暴れている心臓の動悸を自覚しつつ、ウォルセンは水中で口元を覆った。

（あんまり昔のことが鮮明に甦るものだから、思わず『これが、人生最期の走馬燈の思い出!?』とか思っちゃったもんなー）

結局、思い出は一幕で終わったわけで、大したことにはならずにすんだわけだが。

（だけど、なんて荒技くり出すんだ、あの娘はー!?）

絶対、盛大に文句を言ってやる——心に誓ったのも束の間、当の元凶の気配が感じられないことに気づいたウォルセンは、視界の利かない水中で、必死に目をこらした。

怒り心頭に発したこの思いの丈を、絶対叩きつけてやる——との決意でいた彼は、しかし数瞬の後、見いだした元凶娘の様子に目を瞠った。

勝手にひとにまつわりついてきて、こちらを異様なまでに疲れさせたあげく、予告もなしに橋の上から川に引っ張り込んでくれた、まるでどこかの妖怪のような——にしては見目が麗しすぎるが——娘は。

水中を、ずんずん沈んで行っていた。

明らかに意識のないその様子に、ウォルセンは思わず胸中で叫んだ。

（ひとのことを、勝手に引きずり回したくせに、なに勝手に意識失ってるんだよ!? 挙げ句になに、勝手にこの世からおさらばしようとしてるんだよ!?）

許せるはずがない。
ウォルセンは息苦しさを無視して、沈む少女の腕を摑んだ――。

意識を失った人間は、重い。
自分より小柄な少女であろうとも、意識を失っている場合、重く感じる。
だから、通常であればとんでもない災難と呼んでも差し支えない事態ではあるのだが、今回に限ってはそうとも言い切れなかった。
なぜなら、水中にあって溺れる人間に意識がある場合ほど、厄介且つ危険なことはないからだ。
恐慌状態に陥り、夢中で暴れる子供を助けようとして、大の大人が溺れ死ぬことさえある。そのことを考えれば、救助対象である少女が早々に意識を手放してくれたことは不幸中の幸いと言えるかも知れない。
（橋から飛び込むとき、無理矢理おれを巻き込んでくれた経緯がなかったら、素直にそう思えたかもな……）

苦虫を何匹も嚙みつぶしたような顔で、そんなことを思いながら、ウォルセンはしかし腕の中に抱き込んだ少女を離そうとはせずに、流れに身を任せていた。

数日前の大雨のせいで、川は増水していたが、さすがに時間も経っており、透明度が戻っていたのが幸いした。自分から川に飛びこんだくせに、あっさり気を失ってしまい——一瞬、ナルレイシアの演技かと思い、襤褸が出るまで待とうかとも思ったのだが——ずんずん身体が沈んでいくのを目にしてしまっては、さすがに放ってはおけなかった。

手を伸ばして抱きこんで——体勢を変えるには流れが速すぎたため、力を抜いて従っているというのが現状だ。

街中を走る川だから、幸い滝を心配する必要がない。

そのことは純粋に嬉しい……嬉しいのだが、厄介事をひとつ経る毎に、段々腕の中の少女との縁切りが難しくなっているような気がするのは……杞憂だろうか？

どれほど邪険に振りほどいても、しつこく……もとい諦めることなく、切々と友好的関係を築こうと歩み寄ってきた彼女の目的は、少なくとも今の時点では成功していると言ってもいいと思う。

その選ぶ手段がもの凄く強引で、もの凄く非常識で、結果的に有無を言わさない代物であるから、とは言っても。

（あー、精霊の気配が戻って来たな。となると、やっぱりさっきのは、結界術師（けっかいじゅつし）の仕業かな……）

精霊と、彼らとの交感能力を持つ人間とを途絶する力を振るえるのは、東方社会で生まれたという結界術師以外にはいない。

だが、そうそうお目にかかれる存在ではない。腕にもよるが、精霊の動きさえも妨害するほどの力の持ち主であれば、雇うには相当の資金と人脈が必要とされる。

そして、そんな何者かに狙われる心当たりが……不幸なことにウォルセンにはあった。

（普通なら、それだけで狙われてるのはおれだと断定してもよさそうだけど……うーん、この娘の場合なぁ……）

常識的に考えれば、いくらエルスカーネ公爵の知り合いだと言っても、見目がいいだけの若い娘が結界術師に狙われる可能性はまずないと言い切れる。

いかに本人に、誰かに狙われる心当たりがあったとしても、だ。

だが……。

（本当にこの娘が『選定者』なら……狙われてもおかしくはないんだよなぁ……）

選定者とは、時に一国の運命さえ左右する存在なのだから――。

だが、その少女が、自分につきまとう理由を考えると、頭が痛くなるのも事実で……どうし

たものかと、考えに耽りかけたとき、大きな波に襲われ、ウォルセンは意識を現実に戻した。

（いけない、いけない）

考えなければならないことは確かに山ほどあるのだが、それに気を取られて命を落としては何にもならない。

まずは、腕のなかの少女ごと、岸に上がるのが先決である。

水の浮力にも助けられ、ナルレイシアを抱え込んだまま、彼は流れの先に目をやり、洗い場を見つけると、そこに向かって泳ぎ始めた。

とにかく陸に上がるのが先だった。

洗い場の張り出した部分に、片手で捕まると、ナルレイシアの上半身がそこに乗るように持ち上げた。そちらに意識を集中しすぎたせいで、一瞬流れに呑み込まれそうになったが、何とかやり過ごすと苦労しつつ這い上がった。

息が上がっている。

当然だ。

ほとんど眠っていないところを疫病神に見つかり、全力疾走で逃走を図るも失敗し、更には今度は刺客に襲われ、不本意ながらも疫病神と一緒に逃げ回り——果てはその疫病神の策に嵌って川に引きずり込まれたのだ。

これで、疲れるなというほうが無理だろう。
（というか……）
改めて、今朝からのことを冷静に考えるだに――感じるのは。
（この娘、本気でおれにとって疫病神じゃないのか!?）
ということ。
（さすがに意識を失ってまで、縋り付いてくるような化け物じゃないだろうし、いっそ、ここに置き去りにするというのもひとつの手かも……）
などと、ちらりと非情なことを脳裏に浮かべたものの、実行に移すにはウォルセンは根っこの部分で素直でありすぎた。
取りあえず、ナルレイシアの息があることを確かめた後、そうっと離れようとして……不意にあることに気づいたのだ。
このあたりの治安があまりよろしくないということに。
（迷うな、おれ！　ここで逃げなきゃ、どこまでもつきまとわれるぞ！）
そうは思っても、未だ意識を取り戻さない少女は、一見したところ、とびきりの美少女にすぎないわけで。
（この娘なら大丈夫だ……なんてったって、エルスカーネ公爵がついてるんだし、精霊の親愛

を受けてる知り合いもいるって言う話だし！）

自業自得とはいえ、全身ずぶ濡れになった姿は痛々しい。

一刻も早く着替えさせなければと、誰の目にも映ることだろう。

だが、もしかしたら、着替えさせるのではなく、脱がすことにのみ意欲を覚える者が出るかも知れない。

（い、いや……きっと大丈夫だ。結界術師は力を解いたし、今ならその精霊と仲良しだってひとにだって彼女の居場所は調べようはあるわけだし……そう、そうだ。ファティ・リンシャって、あの気持ちのいいご婦人だよな。うん、あの女性なら、きっと今頃精霊のほうからこの娘の居場所ぐらい教えてるに違いない）

そばには王家の重臣であるエルスカーネ公爵がいるのだ。

放っておいても、きっと心配はいらない……はず。

自分がいつまでも、彼女のそばについている必要はないのだ。何度も何度も何度も何度も、ウォルセンは自身にそう言い聞かせ、彼女を残して立ち去ろうと――した。

だが、その度に、彼の本質に根ざす部分が「このまま放置して、悪い人間に拾われたら」とか「拾った人間が、この綺麗な顔につい、ふらふらっと悪心を起こしたら」とか「複数の人間が一緒に見つけた挙げ句、中身のとんでもなさを知らないままに奪い合いに発展して、最悪傷

つけ合うことになったら」とか……まあ、ほかにも色々。
悪い未来ばかりを想像してしまい、しかもナルレイシアの容貌は、それを「杞憂」の一言で片付けるには厄介なほどに整ったものであったから――結局、動くに動けなくなってしまったのである。
『ディー』
その思い出の声に何故か、ナルレイシアの「ディーさん」と呼ぶ声が重なった。
同じ名を呼ぶからなのか、その響きに似たものを込めるせいなのか……わからないものの、どうにも無視できず、ウォルセンは「ああ、もうっ！」と匙を投げた。
理性は放り出せ、と言っている。
どう考えても、実家にとっては天敵とも言えるエルスカーネ公爵縁の娘だ。絶対放っておいた方がいいと思うのに……。
「……仕方ない……」
馬車を拾うまでのことだ――そう自身に言い聞かせながら、ウォルセンはナルレイシアに呼びかけた。
（確か……名前は……）
「ナルレイシア、さん？」

反応なし。

だが、ぴたぴたと軽く指の背で頬を叩いたところ、彼女の睫毛がぴくりと震えた。

「ナルレイシアさん、目を覚まして」

再度の呼びかけに、ようやく少女の瞼が上がった。

「……ん？　あれ……ディーさん……？」

状況が理解できないらしく、何度か目を瞬かせたナルレイシアは――。

「そうだ、川に飛び込んで……っっ！　ああ、わたしったら痛みで気を失っちゃったんだわ！　ごめんなさい、ご迷惑をおかけしちゃって！」

気がついたら、思い切り厭味を言ってやるつもりだったウォルセンは、ある意味機先を制され、内心ため息をついた。

（先に謝られたら、あれこれ文句が言えないじゃないか……計算、は……してなさそうだよな。天然か？　天然なのか？）

せめてもの意趣返しさえも封じられ、ウォルセンはがっくりと肩を落とした。

「……もう、いいよ」

それより、立てる？

言いながら、さっさと立ち上がった彼は、ナルレイシアに手を差し出した。

その心中は、半ば諦めの境地に至っていた。

（逃げようとすればするだけしがみつかれるのかもしれない……なら、いっそ、ある程度納得してくれるまでつきあうか……）

洩れそうになるため息を呑み込みながら、ウォルセンが覚悟を決めた次の瞬間、嬉しそうに微笑んだナルレイシアだったが、その笑顔の命は短かった。

彼の手を借り、立ち上がろうとしたまさにその刹那――。

「い――――痛っっっ！」

……淑女らしからぬ悲鳴、再び。

ナルレイシアの左足の爪が、水面に叩きつけられた衝撃で綺麗に割れてしまったことを、彼が知るのはこのすぐ後のことだった――。

# 7

石畳の上を歩くその足下からは、奇妙な音が奏でられていた。
じゅぷ、じゅぷと水が溢れるようなそれに、ナルレイシアは言いようのない居たたまれなさを覚えた。
その思いに比べれば、他の感情など些末と言ってもいい。
たとえば、道行くひとの好奇に満ちた視線とか、濡れてはりついた服に対する不快感とか……まあ、他にも色々あるが、この居たたまれなさには遠く及ばない。
「……ディーさん……」
声をかけても、すぐには答えは返ってこなかった。
怒っているのか呆れているのか疲れているのか——恐らくは全部当てはまる。
そうさせるだけのことをしてしまい、いま現在も継続させている自覚があるだけに、ナルレイシアはますます身を小さくしてしまうのだ。

「……恥ずかしいのはお互い様。しっかりしがみついてて」
不機嫌を隠さない声で告げられ、彼女は「はい」と小さくうなずくしかなかった。
ちなみに、水音を洩らしながら歩く足音はひとつ――ディーシアのそれだけだ。
ナルレイシアの足は、宙に浮いている。
膝裏にはディーシアの左腕が差し込まれ、その右腕が彼女の背中を支えている――そうしてナルレイシアの両腕は、そんな彼の首にしっかりと回されているという格好だ。
いわゆるところのお姫様だっこ。
しかもふたりとも全身濡れ鼠であるため、目立つことこの上ない。
（ああぁぁ、居たたまれないーっ！）
穴があったら埋まりたいと思うナルレイシアは、先ほどの自分の行動を、海より深く悔いていた。
どれをか、と言えば、川に飛び込んだことをだ。
道連れにされた青年からすれば、ほかにも色々反省して欲しい行動はあっただろうが、それはナルレイシアの知るところではない。
（わたしったら馬鹿だわ……爪にヒビが入ったようだって、わかっていたはずなのに、考えなしにあんな高いところから川に飛び込むだなんて……水に落ちた瞬間、衝撃がかかるだなんて

こと、少し考えたらわかりそうなものなのに！）

そのせいで、爪が綺麗に割れた上、痛みのあまり無意識に手足をばたつかせたせいで、半分ほどはがれかけてしまったのだ。

（せめて頭から飛び込んでたら、足にかかる負担も少しは違ったはずなのに……っ！　ああ、わたしの馬鹿馬鹿馬鹿！）

ディーシアが知れば「問題にするところが激しく違うだろう！」と怒鳴られそうなことを、しかし真面目にナルレイシアは考えていた。

それというのも、そのせいで立ち上がることさえできなくなり、結果としていまの状況があるからである。

痛みのあまり声を上げた後、思わず蹲ってしまったナルレイシアに、ディーシアが向けた眼差しは……厳しかった。

『……足、肉刺が潰れたって感じじゃないね？　見せて』

声も――かなり怖かった。

『あ、いえ……』

お構いなく――と言いかけたものの、そうつづけられなかったのは……偏に底冷えしたディーシアの眼差しに縫い止められたせいである。

『見せて』

彼の声は、否やを言わせぬ迫力に満ちていた。

しかし、彼の言い分は、常識的には失礼なものである。

年若い女性に素足を見せろというのは、恋人関係であろうとも、素直には応じられない暴言なのだ。

だが……しかし。

ナルレイシアが、ディーシアと出会って以来彼に対して働いてきた非常識を振り返れば、とてもではないが責められないというのも事実だ。

『いえ、あの……でも、ですね……』

ナルレイシアの想像通りであるとしたなら、爪はぱっくりと割れて、しかも半ばはがれかけているはずだ……そんな、見ているだけで痛くなりそうな代物を、他人さまの目に晒すのはどうにも躊躇われた。

……やはり、どこか大きくずれているナルレイシアだった。

しかし、すでに据わりきった目をしたディーシアに容赦はなかった。

『もう一度だけ言うね？　見せて。でないと……ひん剝くよ』

笑顔が恐ろしいと思ったことなど、皆無ではなかったものの、この時のディーシアのそれと

声は、金縛りにあうほど迫力に満ちたものだった。

ナルレイシアは声にならない悲鳴を洩らした。

（やる。いまのディーさんなら、間違いなく有言実行で、やる！）

恐ろしい確信を抱いた瞬間、彼女は全面降伏を決意した。

そうして……現在の仕儀に至るわけである。

最初にディーシアが申し出たのは、ここまで恥ずかしいものではなかった――いや、それも十二分に注目浴びまくりの結果とはなっただろうが。

『その足じゃ、歩けないだろう？』

との、至極もっともな言葉に、不本意ながらもうなずいた彼女に、彼は最初背負って運ぶ旨を申し出てくれたのだ。

自分がディーシアに迷惑がられている自覚はあったものだから、正直なところ彼のこの言葉には思わず目を瞠ってしまったナルレイシアだった。

『……置いて行かないんですか？』

皮肉でも厭味でもなかった――正直な心境を吐露しただけだった。

ただし、配慮には欠けた発言だったかも知れない……とは、後にこの時のことを振り返った折、ナルレイシアが思ったことである。

――配慮というより神経を疑う発言だった！

とは、やはり後に告げられた当事者の片割れの台詞だ。

『ここで置き去りにするぐらいなら、川の中で暢気に気を失ってるあなたに気づかないふりして見捨ててたよ！』

自棄になったようなディーシアの返答には、確かに「そうしてやればよかった」という思いが強くにじみ出ていた。

何と答えていいのかわからず、つい『それは申し訳ないことを……』などと、自分でもわけのわからない謝罪の言葉を口にした彼女に、ディーシアは『……まったくだ』と身も蓋もないそれを返してきた。

むっとしなかったと言えば嘘になるだろう……しかし、彼にかけた迷惑を思えば、口を噤むしかなかった。

そうして、なにやかやと言いながらも、結局のところお人好しなディーシアは、『乾いた服に着替えて、馬車に乗せるまでは面倒みてやるよ』と――実に不機嫌且つ不本意そうな顔で――約束してくれた後……。

『痛いだろうけど、ちょっとの間だけ、立てる？　子供みたいで恥ずかしいかもしれないけど、負ぶってくからさ……』

と、親切極まる提案をしてくれたのだ。

ところが、ナルレイシアが、これに応えられなかった。

傷めたのが、小指の爪だったせいだろうか、いかに重心を右足にかけようとしても、背筋を突き抜ける強烈な痛み故に、どうしても立ち上がることができなかったのだ。

『……ご免なさい。立てそうにありません……』

情けなさ倍増、自己嫌悪の嵐に見舞われながら、泣きそうな顔で自己申告したナルレイシアに、ディーシアは何かを悟ったかのようなため息をひとつ洩らすと、『じゃあ、これしかないね』と言って——今に至る。

その足の向かう先は、ナルレイシアには謎である。

だから、つい尋ねてしまった。

「あの……ディーさん」

「それ、止めて」

唐突な言葉に、ナルレイシアは困惑に瞳を揺らした。

「その『ディーさん』っていうの……勝手だとは思うけど、ちょっと凹むから……ウォルセンか……ウォルでもセーンでもいいから……さ」

何でもないことのように告げながらも、どこか深い傷を負っているような翳りを感じ取り、

ナルレイシアは一瞬息を呑んだ。
出会ったのは、昨日。
以来押しに押して押しかけて——けれど、こんな声を出すディーシア……否、ウォルセンを見るのは初めてだった。
なにかがあるのだと直感且つ確信したが、それは不用意に触れていいものだとは思えなかったから、彼女は素直にうなずき、深く問いただすことをしなかった。
だが、それでも、尋ねたいことはやはりあるわけで。
「ええと……じゃあ、ウォルセン、さん……？」
「なに？」
「わたしたちは、いま、どこに向かっているんでしょうか？」
答えは簡潔明瞭だった。
「おれの借りてる部屋」
声が、楽しげに弾んでいたのは気のせいだろうか——。
「はあ、そうですか」
何の感慨もなく答えたナルレイシアに、なぜだかディーシア改めウォルセンががっくりと肩を落とした。

「あなたね、おれは一応男だよ？　その部屋に身動きもならない女性を連れて行くって言ってるのに、他に感想はないわけ？」

少しは危機感抱けよ？

という、ウォルセンの思いは、しかし全然全く、ナルレイシアに届くことはなかった。

それは彼女が天然であることだけが理由ではなかった。

ナルレイシアの天然ぶりに、周囲はついつい失念してしまうのだが、彼女は思春期以降、その美貌で普通のお嬢さん以上に、その手の危険には関わってきた経験者であったのだ。

その彼女が、絶対の自信を持っていることが、ひとつ。

「ああ、そんなことですか。ウォルセンさんなら心配いりませんもの。だって、わたしどころでないって目をしてらっしゃいますし……それに、お部屋になら『ディーシア』さんのドレスもあるから、わたしの着替えもできると思ってのことでしょう？　ウォルセンさんは優しい方ですね」

にっこり笑って応じたナルレイシアに、ウォルセンはつまらなさそうに肩をすくめた。

「無理矢理巻き込んだ人間が言う台詞じゃないよ」

「無理矢理だなんて……」

と、ナルレイシアが反論しかけるのを、ウォルセンが強引な手口で阻止することとなったの



は、彼が借りていると思しき部屋のある建物に近付いたときのことだった。

突然、有無を言わさずに口を塞がれた瞬間こそ怒りを覚えたナルレイシアだったが、幸か不幸か災難慣れしている彼女は瞬時に異変を感じ取った。

だからこそ、一言の説明もなしに踵を返したウォルセンに大人しく従ったわけだけれど、その後の彼の言葉には、さすがに怒りを抑えきれなかった。

よりにもよって、ウォルセンはナルレイシアを相手にした場合における最悪の選択をしたのである……！

「ああ、もう、我慢も限界」

突然冷ややかな声を上げるなり、ウォルセンはとんでもなく乱暴な手に出た。

すなわち、彼女を抱き、支えていた左右の腕をぱぁっと離したのだ。

普通なら、添え物にすぎない、ナルレイシアの両腕がウォルセンの首に回っていることなど何の支えにもならないはずだった。

しかし、言うまでもないがナルレイシアは決して普通ではなく、その勘働きの鋭さも尋常ではなかった。

「げ」

予想外の事態に、声を洩らしたウォルセンに、腕のみの力でその首にしがみついたままのナ

ルレイシアは、にこりと微笑みかけた――ウォルセンの目には「にやり」としか見えなかったかもしれないが。

「……前言撤回して、置いていくつもりだったでしょう？　でも、絶対逃がしません」

後にこの時のことを振り返ったとき、「逃れられない魔に魅入られるとは、こんなことかと思った」――と嘆息混じりにウォルセンは語ったと言う……。

# 8

なにか、とても深い事情を抱えているひとなのだろうな、とは薄々察していた。

最初の出会いが出会いである。

似合わないとは言わないが——本人にとっては不本意だろうが——地味の一言に尽きる衣装を身に纏い、性別を誤魔化している人物に、事情がないわけがない。

誰からか、身を隠しているのはすぐにわかった。

異能の持ち主であることは一目でわかったから、そのせいかとも思ったが、それ以外の可能性だって、ナルレイシアはあれこれ考えはしたのだ。

どこかの若様のお忍びなのかもとか、それとも家出中なのかもとか……最悪の場合、誰かに狙われているのかも、とも思った。

（……予感はね、あったのよ……）

外れてほしいと心から願いながらも、恐らくは最後の、一番厄介な事情がからんでいるであ

ろう身の上ではないか、と……。

本当に、心底違っていてほしかったのだけれど。

だが、朝から共に行動したことで、彼――ウォルセンがとんでもない背景を背負わされていることがはっきりした。

街中で襲われたときこそ、すわ「ナサリエル家残党の仕業!?」と思いこみ、大いに焦ったナルレイシアだが、手を引かれて一緒に逃げている内に、色々なことに気づかされたのだ。

まず第一に、ウォルセンがこうした騒ぎに慣れているということだ。

命を狙われたとなれば――特に他人の巻き添えでそうなった場合、誰しも冷静さを失うものだ。

ところが、ウォルセンには最初からそんなところがなかった。

狙われているのは恐らく自分だからと、ナルレイシアが自己申告したときも、彼の態度は落ち着き払ったものだった。

そうして続く逃避行の最中、ナルレイシアはやはり気づかされることがあった。

ウォルセンの選ぶ逃走経路は的確で、たまに攻撃を受けることはあるとはいえ、それ以外は危険に晒されない道を選んでいたのだ。

わざと大通りのひとごみに紛れることで攻撃を封じたり、ひとひとりがようやく通れる、小

径と呼んでいいものか躊躇うような小路に入り込んだり……一々あげればきりがないほど、彼は「いざというとき」のための情報をその身に蓄えていた。

それは、目的を持って集めようと思わなければ手に入らないものだ。

いつ、危急の際となろうとも、完璧に対応できるだけの準備を彼は用意していたのだ。

一般人ではあり得ない。

恐らく、ウォルセンは命を狙われる経験を、一度ならず味わってきたひとなのだ。その上でこれまで生き延びてきた。

恐らく、ナルレイシアがこれまで経験してきた危険とは一線を画した、明らかに命のやりとりが平然と行われる「戦場」を生き抜いてきた、ひと。

途中で、そのことに気づいた。

それと同時にナルレイシアは目の前が暗くなった。

前回の一年前、選定者に選ばれはしたものの、肝心要の『次代さま』がぎりぎりの危機的状況に陥るまで見つからなかったのに比べ、今回早期に「間違いなし」と思える候補を見いだしたことで浮かれていた心の風船に、針で穴が開けられてしまったも同然だったからである。

(見つけるまでは早かったけど、見つけた相手は事情ありありすぎーな御方でした――って、こと?)

問うまでもない現実から、それでも目を逸らしたくて、ナルレイシアは虚ろに自問した。
結局、答えはひとつしかないのだけれど。
（……まあ、なにがどうであろうと、しがみついて離れないけどね！）
とにかく、神宝『翠唱子』に触れて貰わなければ話が始まらない。
始まりもしないうちに、どれほど邪険にされようとも諦めて引き下がるわけにはいかないのである。
そうこうしている時のこと、なんとはなし、イヤな予感を覚えた。
命の危険を感じたわけではない。だが、何となくではあるが……しっかりと確信できてしまったことがあった。
橋から川に飛び込むことを選ぶ切っ掛けになった折、感じたものと同じそれは……。
（あ、このひと……ウォルセンさん、無理矢理にでもわたしのこと切り捨てようとしてる……自分にとって邪魔だからってわけじゃなくて、巻き添えにしないために……）
その心遣いは嬉しい——だが、ナルレイシアとしては受け入れる気皆無な代物だった。
だから、彼女はウォルセンがいつ、どんな行動に出ようとも対処できるように心の準備をしたのである。
そうして、その時は訪れた。

自分が借りている部屋に向かっているのだと告げたウォルセンは、何事かに気づいた瞬間、乱暴この上ない方法でナルレイシアを放り出そうとしたのだ。

（冗談じゃない！）

すかさず、ひしっと彼女はウォルセンの首筋にしがみついた。

突然地面に落とされたせいで、割れた爪の指には激痛が走ったが、そこは根性で力を緩めなかった。

（させるもんですか！）

ナルレイシアは固く決意していた。

自分の命も狙われているくせに、とことんお人好しな青年は、狙われている的が自分だと悟るなり、ナルレイシアを守るために置き去りにしようとしたのだ。

その決意の裏に、自身の命に対する執着の薄さを、彼女は確かに感じ取った。

だからこそ、しがみついたのだ。

この際、足手まといでもなんでもいい。彼の命を引き留めるためならば、彼のお人好しな性格につけこむことさえ厭わないと思った。

それは、その瞬間に最善と信じた選択——。

「……絶対、逃がしません」

宣言した彼女に、ウォルセンは忌々しげに顔を顰め、吐き捨てるように言い放った。
「……この、最凶の疫病神が！」
いやな……不安な感じが、少しだけ払拭された。
ナルレイシアはもう一押しとばかりに、表には出さずに必死に考え抜いたことを、いかにも今思い出したという調子で提案した。
「酷い言い種ですね。でもいいです、迷惑かけてる自覚はありますから」
「それなら」
「でも、敢えて言います。着替えられる上に安心して休める場所にひとつだけ心当たりがあるんですけど……連れて行って貰えます？」
すこーし距離があるかもしれませんけど。
付け加えられたナルレイシアの言葉に、ウォルセンの眉間の皺が寄る。
なかなか消えないその皺を、ナルレイシアは抱きかかえられたまま――諦めたのか、首にしがみつく彼女を引きずるのに嫌気が差したのか、ウォルセンによる『姫だっこ』は復活していた――飽きることなく見つめつづけた。
無言の攻防が、しばし続いた後――。
勝敗は、決した。

「……どこ？」

不本意と顔に大書きした青年の顔からは、先ほどまでの死の誘いに乗りかねない危険な翳りは消えていた。

「さっき、逃げ回ってる最中に、ちらっと見かけたような気がするんですよね、革の盾と短剣が描いてある看板」

その特徴的な図柄に、すぐに思い当たったのだろう——ウォルセンがすぐに応じた。

「……ダカール商会か？」

ナルレイシアの顔がぱぁっと明るくなった。

「ご存知ですか!?　じゃあ、そこに行ってください！」

「行ってくださいと言われても……そりゃあ、扱ってないものはないと言われてる大商会だから、服ぐらいはいくらでもあるだろうけどな……おれたちの状況を考えたら、店に入れるかどうかも怪しいぞ？」

ウォルセンの声音は、機嫌の悪さを反映してか、今や最低レベルに落ち込んでいた。

しかし、ナルレイシアはお構いなしだ。

「ああ、それなら全然問題ありません」

能天気に言い放った彼女に、ウォルセンが不機嫌というよりは不快げな気配を放ち始めたと

き、彼女はあっさりと自らの出自を告白した。
「名乗るのが遅くなってご免なさい。わたし、ナルレイシア・フォイリリル・ダカールと申します。ダカール商会の社主であるリンレイド・ダカールは父ですけど……、わたし自身も商会の株の五分は持ってますから、服を用意して貰うぐらいのことはできると思います」

以前小耳に挟んだ話だが、遙か東方には不思議な妖怪が生息しているのだという。
ひとの背中に取り憑くなり石となり、子供のような泣き声を上げながら徐々にその重みを増していくという不思議且つ迷惑な化け物らしい。
腕の中にいる少女は、間違いなくその眷族に違いない――ウォルセンは頭痛を覚えながら、ダカール商会への道を歩きつづけた。
（この娘が、ダカール商会社主の娘で株主……こんな娘に株持たせるだなんて、何を考えてるんだ、社主!?　いや、五分なら大株主とは言えないか……いざという時のための親心なのか？）
だとしても、どんな育て方をしたら、こんなとんでもない娘が出来上がるというのか。

ナルレイシアの父親であるリンレイドが耳にしたら、「育てたわけじゃない、裏山の妖怪爺ぃのせいで、こう育ってしまったんだ！」と力の限り抗弁するに違いないことを考えながら、ウォルセンは向後のことに頭を悩ませていた。

まあ……落ち着き先があるというのはめでたいことだ。

彼女ではなく自分が狙われていることがはっきりした以上、すぐにも高飛……もとい、エアランを離れなければならないわけで、その際、置き去りにもできない困った疫病神を押しつける場所が見つかったのは、本当にありがたい。

梃子でも離れないという意思表示をしているナルレイシアだが、さすがに着替える際には別室での行動になるだろうし、何とかその間に隙を見つけて逃げ出すしかない……と、そこまで考えたとき、ウォルセンはあることに気付き愕然とした。

（着替えって……おい、商会の事務所に送り届けた時点でさよならって線を考えもしなかったって、どういうことだ？）

普通、そこが一番別れやすい場面のはずだ。

だが……。

（あ。あー、そうか。なんとなく学習したわけだな、おれ。この娘のこれまでの言動からして、絶対素直に解放してくれるはずないもんな。店員やらに何のかんのと説明して、おれを逃

がそうとはしないぞ、きっと。お詫びだとかお礼だとか言い出して、着替え提供とか申し出て……うーん、確かにそれはありがたいけど、いつまでも一緒にはいられない以上、やっぱり出来れば到着前に縁切りしたいところだよな）

ウォルセンとしては、もちろん全身濡れ鼠の現状は楽しくも嬉しくもない。

乾いた清潔な服に着替えられるのなら、彼女の厚意を受けることにも否やはない。

だが、そこには、どうにも譲れない一線が存在するのだ。

すなわち、彼女のすぐそばにいる、エルスカーネ公爵ガスカールという、決して無視できない脅威が……。

彼と近付くことなど考えられない。

それは一族を危険に導くことだ。

いや、ごくごく正直なところを明かすなら、一族のことなど、さほど重くも大切にも感じてはいない。

家を出たぐらいだ。

一族のなかで好きだと思える人間は、実の両親を含めたところで両手の指の数で足るほどしかいない。

もっと本音を言えば、その限られた人間を除けば、ウォルセンは自分の人生を勝手にねじ曲

げた一族のことが大嫌いでさえあった。

一族に伝わる『御徴』だか『聖印』だか知らないが、たかが痣ひとつに目の色を変えて、幼い自分を家族から引き離したり、そのくせ自分が本家から遠い傍流出身であることを持ち出して排除しようとしたり、逆に『聖印』を異常なまでにありがたがったり――一族の多くの大人達が騒ぐさまは、ウォルセンに嫌悪しか植え付けなかった。

それでも、かれが一族を守らなければと思うのは、偏に彼の大切に思うひとたちが、一族の中枢を担う位置にあるからだ。

（アッシュ……お義母さん……）

彼らの幸福を願い、守ると思う以上、自分はどうあっても王家に近しいエルスカーネ公爵と交誼を結ぶわけにはいかないのだ。

最早言い伝えにすぎないとは言え、自分の左の二の腕には、『聖印』と呼ばれる痣があり、それは一族を揺るがすには充分な力を持っているのだから。

エルスカーネ公爵には、この存在を知られることすら、禁忌だ。

何としても、腕の中の少女との縁は早急に断ち切る必要がある。

だが……前にも記述した通り、ウォルセンは根が善良に出来ている。

足の爪を割ってしまい、ひとりでは歩くどころか立ち上がることさえできずにいる少女を

――たとえそれが、どれほど厄介な事情を背負っていようとも――その辺に放り出してお終いにできるような割り切り上手にはなれなかった。

だもので、彼は結局、彼女が指示したエアランのダカール商会の玄関まであと十数歩というところまで、あれこれ思い悩みながらも、彼女を抱きかかえたまま来てしまっていた。

悩みに気を取られすぎて、現実から少々意識が乖離していたとも言える。

そんな状況だったものだから、突然耳を打った大声に、びくりと全身を強ばらせた。

……ウォルセンを責めることはできない――そのあまりの大音声に、道行くひとの大部分が一瞬その身を硬くしたのだから。

「ナーシア？　もしかして、そこにいるのはナーシアかい？」

再び、われ鐘もかくやという大声が通りに響き渡った。

……どうやら、先ほどウォルセンを凍り付かせたのは、その男性のあげた声だったらしい。

「ガゼリオ小父さま！」

ウォルセンに抱かれたまま、ナルレイシアが嬉しそうな声を上げた。

男性に抱き上げられた格好で、知り合いと対面しているというのに、彼女にはいっさい後ろめたさや恥じらいというものがない。

十人中八人は振り返らずにいられないような美少女のくせに、である。

（あなた……それは、どう考えても間違ってるでしょうが！）

内心つっこみを入れるものの、では自分としてはどう対応するのが相応しいか、すぐには判断できぬまま――早い話、ウォルセンは凍り付いて、その場に突っ立っていた。

しかも、この後に交わされたふたりの会話を耳にした途端、更なる混乱に意識をたたき込まれ、茫然自失の体に陥ってしまったのだ。

「どうしたんだい、ずぶ濡れになって！　まさか、こんな街中で鉄砲水に攫われたわけじゃないだろうね？」

とんでもない問いかけに、

（をい？）

と思ったのはウォルセンだけではなかったはずだ。

果たして、彼の首にしがみついたままの少女は、ころころと軽やかな笑い声を上げてその疑問を否定した――あまり穏やかとは言えない内容だったが。

「いやだわ、小父さま。こんな街中で鉄砲水なんか出るわけないじゃないですか。あんな経験は一度で充分です」

……つまり、一度は経験したと言うことだ。

「だったら、だったら、まさか、局所的な豪雨に襲われた挙げ句、またしても雷の直撃を受け

たわけじゃないだろうね!?」

ガゼリオの今度の問いには、さすがにウォルセンも呆然としてはいられなかった。

「そんなの、死ぬだろ」

至極当然の感想を、思わず洩らした彼はしかし、一瞬後にこれまで培ってきた常識が覆される衝撃に見舞われた。

「違いますってば、小父さま。さすがにわたしも二度目があったら命はないと思いますもの」

けろんとした態度で答えるナルレイシアを前にして、ウォルセンは常識ではあり得ない奇跡の具現を目にしているのだと、本能的には悟ったが……それでも認識するにはあまりにも非常識すぎる内容だったため、頭の一部は凍り付いたままだった。

なおもありえないような事態を口にして問いかけようとするガゼリオに、ナルレイシアが困ったような笑みを浮かべて、大幅に省略した事情を説明した。

「わたしの前科を考えれば、小父さまに心配をかけてしまうのは当然かもしれませんけど……でも、今回は本当にただの事故なんです。足を傷めたせいで足取りが覚束なかったところ、人混みに押されて橋から落ちてしまったんですが、それに気づいたこの方が、すぐに飛び込んで助けて下さったんです。ちゃんと息もしてたらしいですから、あんまり心配しないで下さい」

（いや、普通それだって充分心配するだろう？　というか、「ちゃんと息してた」って、な

に？）

と、ウォルセンは思ったが……ナルレイシアという少女の周囲に限定しては、常識は常識として通じないらしい。

しかし。

ウォルセンは迂闊だった。

先ほどまで、ナルレイシアをダカール商会に送り届けたら、速攻で撤退する――と心に決めていたはずだというのに、いつのまにかそれが難しい状況になっていることを、すでに手遅れになった時点まで気づくことが出来なかったのだから！

気がつけば、ウォルセンは『ガゼリオ小父さま』から、熱烈な感謝のまなざしを注がれていたのである。

「いやあ、ありがとう！　本当にありがとう、君！　この子ときたら、昔から目が離せない子で……ちょっとこちらが気を逸らされた隙を狙ったとしか思えないタイミングで呼吸停止や心停止を起こすという、実に困った子でね……やぁ、今回は足の爪が割れたぐらいですんでよかった！　それというのも君のおかげだ！　本当によかった……ほっとしたよ！」

ガゼリオが喜んでいるのは嘘ではなかろう――と、信じることが出来た。

しかし、しかしである。

最早逃げることなど忘れかけているウォルセンの意識を揺さぶるのは、衝撃的すぎる事実の羅列であった。

（純粋な災難だけでもそこまでの被害を受けておきながら、どうして人災にまで関わろうとするかな!?　というか、駄目だろう？　本人がどう思おうと、これ以上関わらせるのは絶対に駄目だろう!?）

ウォルセンはその時、ひとつの覚悟を決めた。

後に本人に「そんなの勝手です！」と言い切られてしまうものではあったが、この時のかれにとっては譲れない選択だったのだ。

# 9

リーイン・ル・ファンの本日の機嫌は、あまり芳しいものではなかった。
それというのも、前日の午後、街中で偶然厄介な人物を見かけたせいである。
（幸先が悪い……）
と思ったせいか、昨夜は夢見まで悪かった。
油断ならない一筋縄ではいかない人物だと認識している相手――前述の厄介な人物とは別の人物である――であろうとも、いとも簡単に隙を突かれ、術者にとっては致命的な弱点と言える髪一房をまんまと奪われたことは失態以外の何物でもなく、そのときのことを克明に夢で再体験させられたのは、はっきり言って面白くなかった。
幸先に次いで夢見まで悪い。
そこに、調査を頼んだ情報通の老人からの呼び出しがかかったのだ。
三度目の正直で、今度こそ明るい気分になれる情報が手に入ればいい……と思う一方で、

（こと、あれが関わってる以上、二度あることは三度……の線も消せないな）

と、常の彼らしくない悲観的な思いに囚われかけてもいた。

それというのも、問題の『厄介な人物』は、人間の子でありながら、神々から選ばれたという稀有な資質の持ち主だったからである。

神々に選ばれたとは言え、元々はただの人間――リーインが恐れるような身体能力を持っているわけではない。頭脳についても、まあそれなりに働くようだが、自分の裏を掻くほどの狡猾さは持ち合わせていない。

個人の持つ能力そのものだけならば、件の人物はリーインの障害とはなり得ない。

だが、神々に選ばれた――その一点において、彼はその存在を無視することができないのだ。

現に一年前、順調に進んでいた仕事の最中、その人物が偶然転がり込んできたせいで、彼の予定は大幅に崩されたのだ。その人物が特になにをしたというわけではない――だが、その存在を基軸に、思いも掛けない力が膨れあがり、結果としてリーインが仕事の後金を諦め、早々に立ち去るしかない状況を作り上げてしまった。

その偶然こそが、恐ろしいのだ。

（なぁんで、また見かけるかね）

相手は確か、ロスタロイド在住のはずではなかったか。

（おまけに、周囲の曲者全員一緒にこの街にいるってのはどういう偶然だよ？）

ある意味、自分に対する天の嫌がらせとしか思えない。

財布の中身が淋しい上に、油断も隙もない雇用主に致命的な『質』を握られている現在、なにがあっても今回の仕事だけは成功させなければならないというのに……この符丁は不吉に過ぎる。

（おれって、もしかして神々に嫌われるようなこと、したか……？）

常の彼からは考えられない弱気な思いを抱えながら、リーイン・ル・ファンはエアランの北を目指した。

粗末な掘っ立て小屋が並ぶその一角に、今朝方――正確には夜明け前、彼が前もって渡していた連絡用の鳥を飛ばせて呼び出した人物が住んでいるのだ。

捜し人の左の二の腕にあるという、なんとも特徴的な痣の形状を絵に起こし、由来や逸話はないかと調査を依頼したのは、二日前のことだ。

目にした時、情報通な老人は、物珍しそうにその図案を見ていたから、事前に知っていたとは思いがたい。だから、調べが進むより先に、仕事の方が終わるのではないかと思っていたのだが……これは嬉しい誤算と認識してもいいのだろうか。

あるいは逆に、厄介この上ない凶兆と見なすべきか……。
（いくら考えたところで埒は明かないな）
覚悟を決めて、リーインはある掘っ立て小屋の扉代わりに掛けられた厚手の布に手を掛けた。
「爺さん、呼んだだろ？」
声を掛けて足を踏み込むと、「待っておったよ」という声が迎えた――。

その言葉を聞いた瞬間、スカルトードとガスカールは共に言葉を失った。
同行の青年と仲良く川流れの最中――。
とは、いったいどんな状況だというのか！
しかも、襲われたとは？　いったい何者に？　何の目的で？
浮かんだ疑問を自ら考える材料もないいま、ふたりは矢継ぎ早に、精霊の親愛を受け、現在最も情報に通じていると思われる銀髪の老婦人に問いを投げかけた。
「どういうことです!?　ヴィル・ダカールは無事なんですか!?」

「あの猿娘は、今度はいったいどんな騒ぎに巻き込まれたと言うんです？」

しかし、いかに精霊の絶大なる愛情を受けている柱神とはいえ、ファティ・リンシャとて万能ではない。

「待ってちょうだい、そんなに立て続けに質問されても答えられないわ……ああ、なんとかあの青年が意識を失ったナルレイシアを岸に引き上げてくれたみたいね。自分から飛び込んだくせに意識をなくすだなんて、なにがあったのかしら……あー、なるほど。川に落ちた時の衝撃で、ヒビの入った爪が割れてしまったのね……それは痛いわ」

しみじみとした老婦人の言葉に、聞いていただけでぞくりと寒気を感じたふたりの青年は若干顔を青くした。

戦に出て戦うのは専ら男性であるために、一般には誤解が広まっているようなのだが、現実的な面において、男性と女性、どちらが痛みへの耐性があるのかと言えば、実は圧倒的に女性の方が優位なのだ。

女性が耐える出産の痛みは、男性が体験した場合、耐えきれずに死に至るとも言われているぐらいで、実際それは的を射ているのかもしれない。

爪云々の事情を説明するファティ・リンシャの様子といえば、「まあ、これは痛いわよね」と軽い同情をたたえたものに過ぎないというのに、スカルトードとガスカールのふたりときた

ら、落ち着かない様子で視線をあちこちに彷徨わせる始末なのだから。

そんなふたりの様子に、小さく笑いながらファティ・リンシャが安心させるように告げる。

「取りあえずは大丈夫そうだから、安心なさいな」

取りあえず――そんな言葉を用いておいて、本当にふたりが安心できると彼女は思っているのだろうか。

だが、そんな些細な非難めいた思いを、口にできるはずもない。そうするには、このふたりの青年は目の前の老婦人に心酔しきっているのだから。

「ただ、困ったことね……精霊たちの動きを制限というか、封じる力を感じるわ。恐らく、ロスタロイドでも用いられていたあの不思議な術ね。こちら側にはない種類の力だから、多分東から伝わったものだろうとは思うのだけれど……生憎と、その方面にはわたくしも詳しくはないの」

ファティ・リンシャのこの言葉に、即座に反応したのはスカルトードだった。

彼は活字中毒者であり、本は本であるだけで魅力的だと言い切る、少々偏った価値観を持つ青年だった。

そんな彼にしても、ファティ・リンシャが告げた『不思議な術』に関する知識の蓄えはなかった――ただし、彼にはその件に関する知識を持っていそうな知り合いには心当たりがあった

のである。

「ファティ・リンシャ。うちの傍迷惑な大伯父は、ファエンに来ている……わけなんですよね？」

確認を取るスカルトードの整いすぎた容貌は、不本意と大書きされた不可視の文字によって、勿体ないぐらいに引きつっていた。

鷹揚にして寛容な老婦人が、そんな彼の様子に気づかない風に「そのはずよ」と答えると、神懸かり的な美貌の青年は、諦めたように息をついた。

「……なら、あのひとを呼びつけましょう。気は進みませんが、わたし以上に異郷の術には精通してるはずですから。精霊にそのことを頼んでいただけますか？」

そんなスカルトードを、ガスカールは同情をたたえた瞳で見つめていたが、それ以上の策がないことは彼も承知なのだろう――なんとも言い難い顔をして、彼は年上の友人の肩をぽん、と叩いて告げた。

「スカー、頼む」

そうして、一瞬の後、真剣この上ない表情でファティ・リンシャに問いかけたのである。

「あの猿娘は確かに襲われたわけですね？　挙げ句に怪我を負った、と……」

「……カール。いい加減、あんな綺麗な娘を『猿娘』呼ばわりは止めましょう？　振り回され

て素直になれないのはわかるけれど、あんまり意地を張っていると、あなたは美意識のかけらもない朴念仁だと噂が立つわよ？」

彼女の忠告は、しかしガスカールには『馬の耳に念仏』だった……ようだ。

「みてくれがどうであろうと、ドレスで木に登るのを止めない時点で、猿娘は猿娘です」

はっきりきっぱり言い切る彼の顔に、甘やかな雰囲気はかけらも漂ってはいなかった。

「……ああ、そう」

諦めたように、眉間に手を添えてつぶやいた老婦人は、しかしさすがに一筋縄ではいかなかった。

「それで、ナーシアが襲われて爪をぱっかり割って、半ば剝がれかける怪我を負ったことで、あなたはどう動くつもりだと？」

克明すぎる怪我の描写に、ガスカールの顔がぴくりと引きつった。

それでも、続けられた言葉はエルスカーネ公爵らしい、実に果断で容赦のないものだった。

「あの猿娘は普段の振る舞いがどうであれ、神殿と当代さまが認めた『選定者』であることに変わりはありません。その彼女に危害を加えた者がいる以上、当代さまから後見を任されたわたしが黙って見過ごすわけにはいかないでしょう……向こうの事情など知ったことではありません。全部、調べ尽くしてやります」

「……そう」

最早呆れるより他にないという風情で、深く重いため息を洩らした老婦人は、ふう、と息をつくと、意識を切り替えたのかはきはきとスカルトードに指示を出し始めた。

「……もう、こっちはしばらく放っておくしかないとして、スカー！　先ほどのあなたの提案、さっさと形にしてしまいましょう！　それで、さらにあなたに負担を強いることになるかとは思いますが、アゼルフィアを連れて、ナーシアを迎えに行ってちょうだい」

「それは構いませんが……アゼルフィア嬢は確か、ヴィル・ダカールと貴方とが二人がかりで風邪を甘く見てはいけないと布団に押し込んでらしたのでは……？」

そんな彼女を連れ出していいのですか――？

怖々と尋ねたスカルトードに、ファティ・リンシャはからからを笑いながら答えた。

「イヤだわ、スカー。機に臨み変に応じると言う言葉はこういう時のためにあるのではなくって？」

意訳すれば――状況に応じて臨機応変に動けということだ。

なんだか、ナルレイシアと知り合って以来、ファティ・リンシャが破天荒になっているような気がするのは……単なる気のせいだろうか？

しかし、スカルトードに深く追求する勇気はなかった。

だから……流すのだ。
「……ですね。そうします」
「アゼルフィアならね、大丈夫よ。どうやら出先でナルレイシアが次代さま候補を見つけたみたいです、と言ったら、本当に熱があっても飛び出して行くに違いないから」
にこにこにっこり。
ファティ・リンシャは慈愛に満ちた女神もかくやという笑顔で断言した。

「マーシャスの女神という言葉を聞いたことは？」
老人――オーアンと周囲から呼ばれている人物からの問いかけに、リアンは「いいや」とかぶりを振った。
「それが、今回頼んだことと関係しているのか？」
問いを重ねると、老人はこくりとうなずいた。
「関係というか……そもそものきっかけ、じゃな」
「その、マーシャスの女神とやらが？」

さらなる事情を求めて口にした言葉に、老人がため息まじりにつぶやいた。
「……少々、長い話になる」
「かまわない」
リーインは答えた。
欲しい答えを得るためであれば、時間を割くことなどなんでもない。
「かまわないから、話してくれ」

マーシャス一族が故郷であるエルアク山脈を離れたのは今から五世紀以上前のことだという。
離れた理由は伝えられていないが、当時マンディアル族同士の戦いが、平地にあって目撃されたという記述が残っていることから、何らかの諍いがあってのことだったのだろう——と老人は付け加えた。
「マンディアルってのは、傭兵として有名な民族なんだろう？　同族同士が戦うなんて珍しくもなんともないんじゃないのか？」

リーインが訝りもあらわに首をかしげるのに、老人が答えた。
「それはここ二、三世紀の話じゃよ。当時のマンディアルはエルアクから下りて来ない幻の民族と呼ばれておったそうじゃ」
それが、山脈から下りて来ただけでなく同族で戦ったというのだ。
「よほど珍しかったのだろうな、記述に残っておるのはそのせいじゃ。マーシャス一族が追われるどんな理由を持っておったのかは謎のままじゃがな」
「悪さをして逃げ出したのか、政治向きのごたごたで負けたのか……まあ、考えられそうなのはそのぐらいだが、それでそのマーシャスの女神とやらはどう関わってくるんだ？」
リーインのせっかちな問いかけに、小屋の主は呆れたように肩をすくめた。
「若いくせに気が短いのぅ……いま、そこに話を進めるところじゃったのに」
「なら、さっさと移せよ。別におれは激動の歴史ロマンを聞きたいわけじゃない。要点だけでいいからさ」
「味気ないのう……若い者はもっと熱くなくてはならんぞ」
不満げにつぶやく老人に、リーインは馬鹿にしたように鼻を鳴らした。
「自分が波瀾万丈の人生送ってるとな、他人さまの事情にまではらはらどきどきなんてしてる暇はないんだよ」

自嘲混じりのその声に、老人はちらりと咎めるような目を向けたが、結局なにかを言うことはなかった。

ふう、と物思わしげな息をひとつ洩らし、老人は話をつづけた。

「一族を離れ、また追っ手をかけられたマーシャス族は徐々に数が減っていった。半数ほどに減ってしまった一族を、怪我に倒れたマーシャスの族長の代わりに率いてその運命を切り開いたのがその細君だったそうでな、その女性の額に不思議な形の痣があったそうじゃ」

痣と聞いて、すぐにぴんときた。

「翼ある蛇の……？」

こくりと老人がうなずく。

「その細君にはなんでも不思議な力があったらしい。聴く者の心をとろかすような歌声は、嵐を鎮めることもあれば、時に雨を招くこともあったという……その力のおかげで、マーシャスの一族は全滅せずにすんだという話じゃ」

あまりにとんでもない話に、不謹慎だと思いつつも、リーインは口笛を吹いた。

「そりゃあ、大した誇張ぶりだな。偶然かはったりか……まあ、そこまで伝説に残ってるっていうのなら、もしかしたら未来視だったのかもしれないが」

天候を操るとは、大げさに過ぎる——と、そこまでつぶやいたとき、リーインはひとつの可

能性に気付き、眉宇をひそめた。

（まさか、そんなことがあるものなのか……？　だが、そうだとすれば、マーシャスが追われた理由にもなる……しかし、御柱の君が人間の子を伴侶に選ぶなんてことがあり得るのか？）

そんなリーインの様子を気に留めた風もなく、老人が話を進めた。

「……まあ、大した異能の持ち主であったことは確かだろうよ。しかし、その細君は一族に安住の場所を与えるまでは至らなかった。病か怪我かは知らぬが、若くして死んだとある。いまわの際に、一族の者に約束の言葉を残したらしい――生まれ変わってでも、必ず一族に戻って来る、と。そうして今度こそ安息の地へと導くと……」

老人の告げた内容に、リーインは「なるほどな」とつぶやいた。

「その目印が例の痣で「聖印」ってわけだ」

馬鹿にする響きが宿ったのは仕方のないことだった。

リーインは輪廻に、肉体的特徴が意味をなさないことを知っている。痣はあくまで遺伝的なものに過ぎない。それをありがたがる人間の意識のありようは、彼にとって唾棄すべきものだった。

「……そう馬鹿にするものではない。少なくとも、その徴を持って生まれた子供は、揃いも揃って優秀だったというのだからな。マーシャス一族がいまこのディエーンに落ち着いたのも、

聖印を持つ当主の選択だという話だ。やれやれ、お前さんも災難だったな。伝説に連なる次期当主が家出したとなれば、いろいろ障りがありすぎる……是が非でも連れ戻そうとするだろうよ」

術者の髪を奪うなどという、暴挙にも出るわけじゃ――。

老人の嘆息まじりのつぶやきに、リーインはふと違和感を覚えた。

「次期当主……？　それはないんじゃないのか？　おれの髪を切りやがったやつは、おれより若かったぜ」

当主だと名乗った青年は、どう見てもまだ二十歳には届いていなかった――落ち着き払った態度や物腰が、実際の年齢以上に青年を見せていたが、体格ばかりは誤魔化しようがない。

聖印持ちの家出青年が、あの当主の後継ということはないだろう。

「本当に正式な当主なのか？　あの家の当主が代替わりしたとは聞いてはおらんが……あるいはまだ正式に披露されてはおらんのか、それとも聖印の主が見つかるまでの代理か……なんにせよ、きな臭い事情が隠されていそうじゃな……リーイン坊や、くれぐれも気をつけるんじゃぞ？」

老人の声には、明らかにリーインを気遣い、案じる響きが宿っていた。

そのことに、素直に感謝しながら、彼は「ああ」とうなずいた。

「まあ、そのあたりのことは質を取り戻してから考えるさ。今のままじゃ、どうにも埒が明かないからな」

そう言うと、彼はゆっくり立ち上がった。

知りたいことはひとまず知ることができたのだ。選の巫女――ナルレイシアのこともある。早急に動くに越したことはない。

「じゃあな、爺さん、助かったぜ」

礼を言いながら懐から財布を取り出すと、老人が不機嫌そうに顔を歪めた。

「そんな顔すんなって。さすがにこの早朝じゃ、市も開いてなかったから土産が買えなかったんだよ」

仕事の報酬ではなく、あくまで土産の代わりなのだと重ねて言うと、ようやく老人は差し出された銀貨を受け取った。

「一応受け取ってはおくが、これは酒と燻製肉と腸詰めの代わりにはならんからな。さっさと質を取り戻して、両手いっぱい抱えてやって来い」

「土産に注文をつけるなよ。おまけに増えてるし……」

呆れた爺さんだよなぁ……。

苦笑混じりに本気ではないぼやきを洩らし、リーインは老人の小屋を後にした。

# 10

エアランにおけるダカール商会の店舗兼事務所の建物の一室――初夏とはいえ、川に飛び込み全身ずぶ濡れになったせいで冷え切った身体を、用意してもらった浴室で十二分に暖まったナルレイシアは、現在ほこほこと湯気を出しながら気持ちのいいドレスに着替えていた。

なぜに店舗と事務所のここに浴室があるのか――何となく、ナルレイシアは悟っている。

決算期など、忙しさのあまり、なかなか帰宅できない父――ダカール商会社主リンレイドが、にもかかわらず久々の帰宅の際、清潔な香りを放っていることに、一時期あれこれ考えを巡らせたことがあったせいである。

客相手の商売にあって、清潔感は必要不可欠だということで、父が全店舗に浴室を作っていると知ったときには、「徹夜しても身綺麗に保つための浴室作るより、人員を増やして定時に仕事を終えるようにしたほうが、よっぽど喜ばれるんじゃないかしらん?」と思ったものだが……なにがどう巡り巡るかわからないものだ。

父の少々的外れな気遣いのおかげで、ナルレイシアは現在天国の心地を味わっている。
「はー、気持ちよかったー」
長椅子に腰を下ろし、天井を見上げながらほう、と息をつく。
「暖まったかい？　それはよかった」
そう言いながら、熱い薄荷茶を差し出してくれたのはガゼリオ・ハンドッド。
リンレイドの古くからの友人であり、ディエーン南部地区におけるダカール商会総括責任者である。
王都ロスタロイドはやや北よりであるため、ガゼリオの管轄からは外れているから会うことはなかったが、幼いころからナルレイシアのことを自分の娘のように可愛がってくれたこのひとのことが、彼女は大好きだった。
「本当にありがとうございました、ガゼリオ小父さま。でも、なんでエアランにいらっしゃるんです？　いつもはイリアンにいらっしゃいますよね？」
イリアンはディエーン南部最大の都市である。その規模はロスタロイドにこそ及ばないが、間違いなくディエーン屈指の大都市である。
ガゼリオはそのイリアンのダカール商会において、各地に展開する商会の事業を把握統括する役目にあったはずだ。その彼が、なぜいま、注目に値するとは言い難いこのエアランの支店

所を訪れているのか。

ナルレイシアとしては不思議でならない。

しかし、さすがに生き馬の目を抜く世界で生き抜いてきた強者（つわもの）というべきか、ガゼリオはにこやかに、ごくごく自然に彼女が納得しやすい理由を口にした。

「そんなの、ナーシアが心配だったからに決まってるじゃないか！」

「小父さま、それ全然理由にも説明にもなってませんから。第一、わたしがエアランに来たのもこの店を訪ねることになったのも、あくまで偶然ですし、無理がありすぎます」

言いながら、（あ、でもファエンに向かう途中にエアランがあったわけだから、これは偶然とは言えないか）とは思ったが、そもそも今回の騒ぎがなかったら、商会の方には顔を出すつもりがなかったのだから、ガゼリオの存在が気になった。

とはいえ、それは商会の行く末に関する懸念（けねん）ではない。

先ほど、恩人だと紹介したウォルセンのことを、ガゼリオが一瞬厳しい目で検分するように見つめていたことを、ナルレイシアはしっかり気づいていた。

その目つきには、いやというほど覚えがあったため、彼女は確かめずにはいられないのだ。

「いやぁ、気の回しすぎだよ、ナーシア。ただ、少し気になるのは、君は王家にも縁（ゆかり）のある高貴な老婦人の話し相手としてロスタロイドに行ったはずだろう？　なのになぜ、エアランにい

るのか……しかも、あんな見目のよろしい青年に抱きかかえられるようにして……ちょっと、そのあたりの事情は聞きたいかな、とは思うわけだけれどね？」

さすが、海千山千の狸である。

こちらの質問はないことにした挙げ句、自分の聞きたいことだけ探りを入れてくるあたり、面の皮が厚……もとい、強かである。

（空々しい……わたしがファティ・リンシャのお供でファエンに向かうことだなんて、とっくにお父さま経由で知ってたはずなのに）

ほぼ三ヶ月、屋敷を留守にするという遠出である——ナルレイシアはしっかり、そのことを故郷の家族に手紙で知らせていた。

その際、同行する面々のことも、しっかり報告したのは、過去の教訓があったせいだ。

不幸中の幸いの権化と呼ばれるほどにトラブル体質であるナルレイシアは、しかしなぜか災難に巻き込まれる折、付近にいる異性を巻き込むというか、相手が勝手に飛び込んでくるというか……まあ、そういうことが多々あったのだ。

父や小父さんたちは、そういう場合に限っては、なぜかナルレイシアが大事に至らないことを喜びながら、それでいて恩人と呼んでも差し支えないひとたちと、彼女が接触することを断固として許さなかった。

唯一の例外は、リンレイドがお膳立てしたフィレアの名家――オーブエル男爵家でのナルレイシアの行儀見習い期間中に受けた、男爵令息からの度の過ぎた求愛行為だが……後にかの令息の行状を知った父は「そうと知っていたら、絶対に住み込みの行儀見習いなどたのまなかった！」と叫んだらしい……母と、すでに嫁いだ姉からの情報である。

まあ、それは例外として、だ。

以前ならともかく、ナルレイシアもロスタロイドでそれなりに経験を積んだ。

「小父さま……もしかして、ロスタロイドで親しくなったスカーさんとガス……エルスカーネ公爵を一度見ておこうだとか思われたのなら、それは的外れな杞憂というものですわ。断言しますけど、ふたりとも、わたしはそういう意味で見たことはないし、この先も絶対見ることはないと断言できますもの！」

心配性に過ぎる保護者たちの干渉は、時に過ぎるほどで、おかげでこれまであまり異性の友人を作れなかったナルレイシアは、ここぞとばかりに力説した。

（大体、こっちはいま、恋愛どころじゃないのよ！　あと三人……まあ、ひとりは決まりだと思うけど、それを除いても、この広い世界の中からあとふたりは確実に！　まず神宝見つけてその半身で柱神になられる方を見つけなきゃならないのよ！　下手したら一生かかっちゃうような大仕事押しつけられてるのに、恋なんてする暇ないじゃないのーっっ！）

という本音は、さすがにぶつけられない。

選定者であることは、神殿における最高機密で、家族にすら打ち明けることは許されていないのだから。

その割にはぽろぽろあちこちに洩れているような気がしないでもないが、家族に余波が及ばないことを願うナルレイシアの思いを汲み取り、当代柱神であるアマンシールを初めとする色々な人物が動いてくれたおかげで、ナルレイシアが選定者である事実は、未だに家族には伝わっていない——一体どんな情報もみ消し工作が行われたのかは……考えるだけ恐ろしいので思考の隅に追いやって忘れることにしたのだが。

しかし、そんな彼女の心中を知るよしもない心配性の保護者は、「いや、ナーシアがそのつもりでもね」とか「君の場合、どこに落とし穴が待っているか……」などともごもごとつづけた。

そして。

「それにやっぱりあの青年だよ。事情は聞いたけれど、やはりあの親密そうな様子は気になってしまってね。リンレイドには内緒にしておくから、わたしにだけは本当のことを教えてくれないかい？」

（だから、本当のことってなによーっ!?）

大声で叫び出したいところだったが、そこここで店員が聞き耳を立てているのが目に入ったため、ナルレイシアはぐっと我慢した。

「だから、さっきから言ってるように……あの方は橋から落ちたわたしを助けてくれた親切な方で……」

（ああもう……何度同じ説明を繰り返したら納得してくれるのかしら……）

かなり、結構うんざりしていたナルレイシアは、ついうっかり口を滑らせてしまった。

「……大体、矢を射かけられて逃げ回るのに必死だったのに、そんな甘い雰囲気になんかなるはずがないじゃ……」

ありませんか――と。

つい、本当に、ぽろりと。

洩らしてしまった次の瞬間。

「……あ」

「なんだって!?」

ガゼリオの眉が盛大に跳ね上がった。

（し、しまったっ！）

と思ったが、既に後の祭りというもの。

「ナーシア！　それはいったいどういうことだい？」
険しい表情で追及され、ナルレイシアは己の口を呪うこととなったのである。

そのころ、ウォルセンは別の部屋でほこほこと湯気を出していた。こちらも湯上がりである。
一度は辞退したのだが、川の水が乾きかけた微妙な臭いに、是非にと再度勧められれば、固辞もできなかったのだ。
（あー、生き返る）
別室のナルレイシアと似たようなことを考えながら、彼は気持ちのいい新品の服の感触にほっと息をついた。
とは言え、いつまでもぐずぐずはしていられない。
白鷺館に知らせが走った以上、ナルレイシアを迎えに誰が来るかわからないのだ。それがエルスカーネ公爵であった場合、非常にまずいことになりかねない。
ここはさっさと抜け出したいところである。

のだが。

（あーあ、やっぱりあの娘、やってくれてるよ）

内心の苦い思いを隠したウォルセンの前には、店員らしき女性の差し出した香草茶がある。

それだけならありがたいだけなのだが、焼き菓子も一緒に運んできた女性は、にこにこ微笑みながら、ウォルセンの正面に座って部屋から出て行ってくれないのだ。

「申し訳ございませんが、もう少しお待ちくださいね。お嬢さまとハンドッド支配人もすぐにいらっしゃいますから」

「いえ、どうかお構いなく……」

（ほんとーに、全然構わなくっていいから……というか、ひとりにしてくれ）

ウォルセンの心からの願いは、しかし天に届きそうになかった。

女性の目は、衝撃的な来店を果たした二人連れの片割れである彼に対する抑えきれない好奇心にきらきらと輝いており、この好機を逃すつもりが皆無であることが伝わってくる。

「うちのお嬢さまを助けていただいて、本当にありがとうございました。それで、失礼ですが、うちのお嬢さまとは親しくてらっしゃるんですか？」

強すぎる興味ゆえか、女性は直球勝負をかけてきた。

普通、もう少し婉曲に尋ねるものではないかと思ったものの、どちらにしても答えられる内

容は同じである。

頬が引きつらなければいいと思いながら、彼は差し障りのない事情を口にした。

（黙秘してしつこく突っ込まれるより、適当に好奇心を満たしてやった方が、まだましだろうしな）

「昨日偶然会ったんです。そのときにおれが忘れ物をしたのを、今朝届けに来てくれる途中で……その、足を傷めたみたいで」

申し訳なさそうな顔を僅かに俯かせると、女性は同情的な目を向けてきた。

「まあ……でも、すぐに川に飛び込んで、お嬢さまを助けてくださったんでしょう？　なかなかできることではありませんわ」

声に、うっとりした響きが加わった——もしかしたら、なにか甘い夢を捏造していそうで恐ろしい。

「いえ、おれのせいで怪我させたようなものですから……」

（爪割ったのは、確かにおれが踏んだせいだろうし）

などと考えつつ応じると、目の前の女性はふう、と息をついた。

「……お嬢さまもねえ、さすがにドレス姿では泳ぐのは無理だったのでしょうね。以前男の子の格好で増水した川に落ちたときは、自力で岸まで泳ぎ着いたそうですけど……」

さらりと、なにかとんでもないことを言われたような気がした。
「……はい？」
（死にかけたのは鉄砲水と雷直撃の二回だけじゃなかったのか？）
その二件だけでも、生きているのが奇跡としか思えないというのに……あの少女は、いったいこれまで何度命の危険に晒されてきたというのか。
「ああ、別に誤解なさらないでくださいね？　お嬢さまは別に男勝りというわけではありませんから。そのときは事情があったのですわ。誘拐された先から逃げ出すため、動きやすい服を選ばれたというだけで……」
「……」
どこの世界に、誘拐された身で自力脱出できる男勝りでない少女がいるだろう。
（というか、すでにそれ、じゃじゃ馬とかってレベルじゃないんじゃ……）
くらりと目眩を覚えたからといって、誰もウォルセンを責めることはできないだろう。
（これ以上聞くのが怖い……）
そう思ったウォルセンは話題を変えようと口を開いた。
「彼女のことをよくご存知ですね。ダカール商会の本店はフィレアにあると聞きますが、もしかしてフィレアのご出身なんですか？」

しかし女性はかぶりをふった。

「いいえ。社主の二番目のお嬢さまの波瀾万丈な半生の逸話は、商会中に広まっておりますもの。知らない者はいないんじゃないかしら……あんなにお綺麗なのに、悪運と凶運に愛されるだなんて、本当にお気の毒で……」

そう言いながらも、何となく目が楽しそうだ。

他人の不幸は蜜の味というが、そこまで行かずとも、ナルレイシアの災難遭遇率の高さとその突拍子もない内容に、少なからぬ人間が娯楽性を見いだしているのは間違いないようだ。

（商会中に知られる凶運ぶりってどれほどなんだ……？）

「は、は……神々は大きな務めを背負って生まれた者に試練を課すと言います。もしかしたら彼女はなにか重要な役目を担っているのかもしれませんね」

そう言いながら、ウォルセンはもう、ナルレイシアが選定者であることを疑っていなかった。

そうでもなければ、ひとつだけでも人生に一度あるかどうかという災難を、こうもいくつも切り抜けて来られたはずがないと思うのだ。

（そこにおれを巻き込まなきゃ、頑張れーって応援してやるんだけどな）

それだけはご免なので、早々に縁を切るつもりなのだが。

（しかし、まずいな。このままあの娘が来たら、絶対逃がしてもらえないぞ……ああ、いっそ手洗いを借りるとか何とか言って抜け出そうか……さすがに手洗いの中までくっついては来ないだろうし……）

などと算段をつけていたところ、まるではかったかのように扉が開き、若い女性が顔を覗かせた。

「……すみません、店長……」

なにか困った事態でも生じたのだろう、困惑した様子の女性に、ウォルセンの正面にいた女性が立ち上がった。

「申し訳ありませんが……」

退席する断りを入れる彼女に、安堵する内心を押し隠し、彼は「どうぞ、行ってください」と答えた。

これで、何とか逃げ出せそうだ――店長と呼ばれた女性が扉の向こうに消えた瞬間、ウォルセンは心からの笑みを浮かべた。

## 11

リーイン・ル・ファンは、宿に戻る途中、奇妙な感覚に見舞われた。
馴染みのある気配ではある。
ただし、それは自らが力を揮った場合に関しての話だ――他者の揮うそれを感じるのは久しぶりのことだった。……そう、一年ぶりにはなるだろうか。
（結界術師が、いる）
それは確信だった。
なぜなら、覚えのある気配とは、精霊の動きを制限するための結界術のひとつだったのだから。
東方社会生まれの結界術の遣い手は、こちら――西方社会においては決して多くはない存在だ。決して皆無ではないが、少なくとも大きな街以外で鉢合わせるとは考えにくい。
ちくり、とイヤな予感を覚えた。

（例の聖印持ちの坊やを狙う別の一派、か……？）

精霊の加護も篤い青年を捕らえるために、自分とは違う結界術師が雇われたのか……考えられないことではないが、あまり歓迎できない事態には違いない。

（どうも……あの自称当主殿を信じていいものかどうか、疑問を覚えちまったもんだから、なおさら億劫に感じるな……）

街外れに住む老人からもたらされた情報は、それだけ重要な意味を持っていた。

褐色のつややかな髪の青年は、静かな微笑みをたたえて『家出した義弟』を連れ戻してほしいと依頼してきた。

外は本人が思う以上に危険だからと——その翡翠の双眸に宿る光は心底相手を案じるものに見えた。

だが、それが見せかけにすぎないという可能性は否定できない——老人のもたらした情報が正しければ、あの青年が現在当主の座についているはずがないのだから。それは家出中だという青年のためにこそ用意されたものであるはずなのだから。

確かに、いまこの時代にあって、問題の『聖印』とやらが無条件に尊重されるという保証はない。すでにかの一族はディエーンに安住して久しい。いまさら安息の地もなにもありはしないだろう。

そう考える者たちにとって、時代遅れの痣など持って生まれた子供は邪魔でしかないだろう……問題は、そのなかにあの翡翠の瞳の青年が含まれるかどうか、だ。

含まれるとするなら、自分が依頼をやり遂げたとき、聖印持ちの青年の命運はあの『義兄』の手に握られることになる。

もし違うのだとしても、あれほど複雑な事情を抱え持つ人物を、渦中とも呼べる一族の中心に引き留めるのは混乱を招くだけではないのか。

翡翠の瞳に宿った、怜悧な光を思い出す。

あれは、決して甘い存在ではない。一瞬の隙を突いてこちらの髪を奪った手際といい、その後の落ち着き払った態度と言い、修羅と闇を識っているとしか思えない。

そんな彼が、なにを思って『義弟』を手元に置こうというのか……。

そこまで考えて、リーインはため息まじりにかぶりをふった。

どんな答えが出ようとも、選べる道は限られている。

考えるだけ無駄――とまでは思わないが、考えても望む道を選べる状況でもなかった。

「結構……歯がゆいものだな……」

ぽつりとつぶやいた己の声が、意外に大きく耳に届いたことに半ば驚き、半ば呆れ――そうして彼は唇を噛みしめた。

脳裏に、いくつかの顔が浮かんだ。
しかし今は、それらに心囚われている場合ではない。
ひとつ息をつくと、リーインは一度目を閉じ、それから開いた。
為さねばならないことがある。
そのためにも今は、すべきことをするしかないのだ……たとえ、それが心に染まぬ行為であろうとも。
（悪いな……）
誰にともなく声なき謝罪を洩らして、彼は意識を目指す相手に集中した――。

ガゼリオ・ハンドッドの追及はしつこい上に手厳しかった。
「矢を射かけられて街中を逃げ回っていただなんて……ナーシア！　いったい君はロスタロイドでどんな暮らしを送ってるというんだ!?」
「あ、いえ……だから、ファティ・リンシャとおっしゃるご婦人の話し相手というか、お世話係というか……まあ、お世話に関してはほとんど役立たずなんだけど……」

実際のところ、ナルレイシアがファティ・リンシャの屋敷において、しっかり働いていると言えるのは、膨大な書物量を誇る書庫の本の点検且つ保管、修理ぐらいで……後は、退屈した老婦人のお茶につきあうぐらいだったので、どうしても歯切れが悪くなる。

しかし、当然のことながら、この彼女の答えから、『矢を射かけられ……』の災難に結びつける糸が見つかるはずがなく、ガゼリオは顔色を変えていた。

「そのファティ・リンシャという方は、もちろん信用できる方なんだろうとは思うが……そうでなければ、リンレイドがうなずくはずがないとは勿論思うんだが……その、もしかして、あまりに高貴すぎて、危険を呼び寄せるような御方だったりはしないんだろうね……？」

ガゼリオの言わんとするところを読み取り、ナルレイシアは「いいえ」と即座に否定した。彼は、ファティ・リンシャが権門に連なる婦人であるがゆえに、ナルレイシアが何らかの権力争いに巻き込まれているのではないかと疑ったのだ。

「それは違います、小父さま！」

反射的に声を上げたものの、ではどう説明するべきか——少々悩んだナルレイシアである。さすがに真っ正直に「ファティ・リンシャは実は柱神さまで……」と打ち明けるわけにもいかない。

ここはやはり、面倒を避けるためにも、ガゼリオの心的負担を軽減するためにも、多少の嘘

は必要だろうと判断する。

「高貴な御方であることに違いはないんですけど……その、ファティ・リンシャは、他国の柱神さまに縁のある方で……だから、権力争いとかそういうこととは無縁なんです」

この告白に、ガゼリオは心底仰天した顔になった。

「なんだって!? 柱神さま縁の方……!? なんでそんな方とリンレイドが……いや、あいつも顔が広いからな、確かヴィランド公爵との誼もあったか……その線か……？」

「え、と……まあ、そういう感じかな……」

実際にファティ・リンシャに紹介状を書いてくれたのは、ダカール邸の裏山にいつからか勝手に隠棲していたギスカリールという老人だったのだが、彼がファティ・リンシャとどういった縁故を持つのか、未だに教えて貰えていないナルレイシアとしては、ここはガゼリオの勘違いに乗じるしかなかったのである。

「そういうことなら、そのご婦人の件でナーシアが危ない目に遭うという線はなくなるとして……まさか、ナーシア！　ロスタロイドで恋多き高貴な男性に言い寄られたとかそういうことはないだろうね!?　それで嫉妬を覚えた恋敵が刺客を送り込んできたなどということは……」

ガゼリオの心配性は、底が見えないとんでもない代物だった。

「や、小父さま。考えすぎです。そんな心配さらさら必要ありませんから」

半ば呆れ、手をひらひら振りながら、否定の言葉をナルレイシアが口にした直後のことだ。
声にならないどよめきが、扉の向こうから伝わってきた。
（え……へ？　なに……？）
せっかくの綺麗な顔を台無しにして、間抜け面を晒してしまったナルレイシアが扉を振り返るとほぼ同時に――。
開かれた扉の向こうから、眼福と評するしかない存在が現れた。
「スカーさん!?」
神々しいとしか表現しようのない、人外の美貌を誇る青年の登場に、彼女は目を瞠った。
（え？　いえ、確かにスカーさんが迎えに来てくれても全然おかしくはないんだけど……あれ？　なのになんで、わたしったらびっくりしてるのかしらん？　んー、なんだかてっきりガスカールがぷりぷり怒って来るような気がしてたのよね……）
なんでだろう、と内心小首を傾げたところで、ナルレイシアはスカルトードの背後からぴょこん、と顔を出した少女に気づいた。
アゼルフィア――セルフィアの街で出会い、手に入れた神宝『翠唱子』が縁で今回の柱神選定……というか、見極めの見届け役となった少女だ。
「アゼルフィアも……」

どうしたの、と思わず尋ねた彼女に、赤味の強い栗色の癖毛の少女は、実に嬉しそうに笑って答えた。

「ファティ・リンシャから、ナルレイシアさんが早くも翠唱子の半身を見つけたらしいって聞いて、もう居ても立ってもいられなくて、スカーさんについてきてしまいました！　ご一緒なんですよね!?　もちろん紹介してもらえるんですよね!?」

きらきらと輝く瞳には、期待に満ちた光が溢れていた。

（ま……いまのウォルセンさんなら、ちゃんと男性の格好だし、客観的に見ても綺麗だし、アゼルフィアががっかりするようなことはないだろうから……いいか）

ナルレイシアの予定としては、ウォルセンをしっかり白鷺館に連れ込んだ上で、逃げられないようあれこれ手配してからアゼルフィアに紹介しよう――という段取りだったのだが、この状況なら別に構わないだろうとの判断で、「そうね」とうなずいた。

ただし、ひとつだけ問題があった。

言うまでもない、割れた足の爪のことだ。

手当ては受けたものの、未だに自力で歩くことはおろか、立ち上がることさえできないという状況なのだ。

（うーん、どうしよ？）

迷ったが、それは一瞬のことだった。
善は急げ。
思い立ったが吉日。
ナルレイシアは非常に思い切りのいい性格で、しかも即断即決のひとだった。
「スカーさん、申し訳ないんですが、わたし、足の爪を割っちゃって、歩けないんです。運んで貰えますか？」
扉の向こうから、なぜか「きゃあ」と複数の黄色い声が上がった。
（なに？　なんで？）
思いもしない反応に、目を瞠ってしまったナルレイシアだったが、スカルトードの反応は穏やか且つ紳士的だった。
「わかりました」
と答えると、「失礼しますね」と断りを入れてから、すい、と彼女の膝と胴の間に腕を入れ、ふわりと持ち上げたのだ。
肘と手首の間に彼女を座らせた格好だ。
もちろん、背中も支えている。
黄色い声が、さらに強まったが、ナルレイシアには理由などわからない。

「それで、どちらにお連れすればよろしいでしょう、ヴィル・ダカール？」
「ええっとぉ……あっちの部屋でいいんですよね、ガゼリオ小父さま？」
尋ねたナルレイシアに、何故かガゼリオは言葉をなくした様子でこくこくとうなずいた。
（小父さまで……あ、そうか。スカーさんのせいね。多少慣れたからわたしは平気になったけど、この美貌は免疫ないひとたちには衝撃だものねえ……）
しみじみと、そうかそうかとうなずくナルレイシアに、自分自身の容姿に関する自覚は皆無である。
傍目には夢のように美しい組み合わせだというのに、当事者同士を結びつけているのは、揺るぎない活字への愛情のみなのである。色気も素っ気もあったものではない。
しかし、当人同士に一切その気がなかったにも拘わらず、この日のふたりのやりとりは――アゼルフィアが一緒にいたことは無視されて――長くダカール商会店員に語り継がれることとなった……盛大な尾びれ背びれつきで。
とまあ、それはともかくとして――。
ナルレイシアは数分後、スカルトードに抱き上げられた格好のまま、愕然と身を凍り付かせることとなった。
なぜなら――。

「な、んで……？」

呆然とつぶやく彼女の視界には、無人の応接室が映し出されていたからである。

あるべき――ウォルセンの姿が、ない。

その瞬間、ナルレイシアが洩らした舌打ちを、認識し得たのは彼女を抱き上げているスカルトードのみであったろう。しかし、実の大伯父である柱神の影武者を務めることに慣れた青年は、かけらとて動揺する様子を見せなかった。

ふっと苦笑を洩らした後、美貌の青年は「どうします？」と少女に問いかけた。

答えは、もちろん決まっていた。

「追いかけて、捕まえます」

「捕まえるんですか？」

穏やかに問い返す、スカルトードの声にはしかし、さまざまな問いかけが含まれていた。

「まずは捕まえます。あのひと、命を狙われてるんです……わたしも一緒に狙われました。放っておいたら、絶対まずいと思うんです。ひとりで抱え込みそうな性格だから……」

詳しい彼の事情はわからない。

だが、彼の優しさは本物だと思うし、そんな彼をむざむざ死なせたくはないのだ。

それだけのことで――？

もしかしたら、そう問われるかもしれない。けれど、それだけで充分なのではないだろうかとナルレイシアは思うのだ。

「この疫病神！」

と叫ぶほどに、つきまとわれてうんざりしている存在すら、目の前で死ぬことが看過できずに思わず助けるために動いたひと。

そんなひと、だから――。

「迷惑がられても、生きて貰わないと」

余計なお節介だとしても、生きて――欲しいから。

声には出さなかった。

だから、スカルトードに聞こえたはずがない。

なのに、彼は呆れたような笑顔で、問いかけてきたのだ。

「では、どこに向かいましょう？」

と。

「……スカーさん？」

「貴方の目は、不可思議な力の輝きを捉えるのでしょう？　それは、そのひとの周囲にだけ視えるのですか？　輝きの残滓は見えないのですか？」

指摘されて、初めて気づいた——可能性。
それを信じて意識を集中したら、本当に、視えた。
光の粒の残滓が——砂金を残したかのように、道筋を残している。
はっきりくっきりと、ウォルセンの気配が読み取れる。
——あとは、追いつくだけ。
それだけのはずなのに……もの凄く遠いことのように思えたのは何故だろう。
……わからなかった。

時間はいささか遡る。
「さて」
ようやくひとりきりになれた室内で、ウォルセンはほおづえをついてこれからのことを考えた。
暢気に構えている暇などないが、なにも考えずに逃げ出してもいい状況ではない。
いや、かなり深刻な事態だと言ってもいいだろう。

（部屋には、もう戻れない……）

先ほど目にした不審な男たちの顔に見覚えはなかったが、自分を捜しているのだという確信がある。

なんの目的で自分を捜しているのかはわからないが、どうせろくなものではないだろう――殺すためか、連れ戻すためか……どちらもご免である以上、見つかる危険は冒せない。

（どうして、放っておいてくれないんだろう……）

自分はなにも特別なことは願っていないというのに。

大切な親友の邪魔にならないように、その無事を祈りながら遠くでひっそりと暮らしたい――それだけだというのに。

この腕の痣のせいで、それが許されない。ひどく理不尽だと思う。

「……焼いて、潰せればよかったのに……」

つぶやきながら、ウォルセンはそれのある左の二の腕にそっと触れた。

そこには、引き攣れた火傷の痕がある。

三年前、自らつけたものだ。

無邪気に親友のそばにいることを、周囲が咎め始めたころだった――元凶であるこの痣を憎み、燃える薪を押しつけた。

そのことに気付き、怒りながら手当てしてくれたのは親友だった。
『馬鹿なことを』
いつもは澄んだ湖面を思わせる翡翠の瞳を怒りに燃やしながら、親友はつぶやいた。
『ディー、なんて馬鹿なことを』
と。
そして、二度としたら許さないと、有無を言わさぬ口調で言い切った。
あれほどに怒った姿を見たのは初めてのことだった。
心底恐ろしいと感じ、一方的につきつけられた言葉に、こくこくとうなずいたことを覚えている……もっとも、それだけの痛い思いをしたにも拘わらず、痣は消えてくれなかったのだけれど。
（あのときのアッシュは本当に怖かった……二度と怒らせないようにしようって、心に誓ったぐらいだもんなー）
「って、思い出に浸ってる場合じゃないっていうのに、なにやってるんだ、おれ」
はっと我に返り、ウォルセンはぶるぶるとかぶりをふった——自分の暢気さが信じられなかった。
「これからのこと、これからのこと……身ひとつで旅するのは痛いけど、仕方ないか。あの娘

には悪いけど、この服、途中で売らせてもらおう。かなりいい仕立てだから、けっこう高く引き取ってもらえるだろうし……まあ、濡れ鼠にしてくれた慰謝料ってことで」

心が痛まないでもなかったが、この状況では致し方あるまい。

（そろそろ、いいかな……やっぱり、手洗い借りるのが無難だよな。それで、裏口が近くにあればよし、そうでないなら換気用の小窓から……出られるかな？）

そうなった場合、いささか苦労しそうな上、見つかったらひどく恥ずかしいことになるな……等々と思っていたときのことである。

ざわり、と空気が動いた。

（なんだ!?）

意識を扉の向こうに集中するまでもなく、声にならないどよめきが伝わってきた。

（誰か、来たのか？）

それも、店員が驚きを隠せないような人物が――？

そう考えたとき、ウォルセンの脳裏に浮かんだのは、黒髪紫瞳の青年公爵の顔だった。

エルスカーネ公爵が突然来店したというのなら、確かに皆驚くに違いない――王族のように絵姿が広く出回っているわけではないとはいえ、彼の容姿は特徴的にすぎるのだから。

（だとしたら、まずい！）

最早一刻の猶予もない。
ウォルセンは素早く立ち上がると、それでも足音を殺して扉に向かった。
そっと扉を開いたところ、店員たちの声を潜めた会話が耳に入ってきた。
「見た？」
「すごい……ほんとに人間？」
「あんなひとがいるだなんて……」
「声かけられたって、返事なんてできないわよねー」
「ほんと、ほんと」
どの声にも、陶然とした響きが宿っている。
ウォルセンは内心首をかしげた。
（……なんだ、この反応？　確かにエルスカーネ公爵は見とれるぐらい整った顔立ちをしてるとは思ったけど……人間とは思えないほどってわけじゃないぞ？）
だとしたら、話題になっているのは危惧した相手ではないのだろうか？
だが、すぐにウォルセンは意識を切り替えた――別のささやきが耳に入ってきたからだ。
「お嬢さまを迎えにいらしたんですって！」
という、決して無視できない言葉が。

ぐずぐずしてはいられない――ウォルセンは、そばにいた女性に声をかけ、手洗いの場所を尋ねた。あえて女性を選んだのは、うっとり度が男性より女性のほうに深く出ていたからである。

はたして、半ば心を飛ばしている様子の女性店員は、あっさりと手洗いの場所を教えてくれた――「ご案内します」と言われずにすんだのも幸いだった。

(どんな顔だか知らないけど、ありがとう、感謝しますっ!)

ナルレイシアを迎えにきた人物に、声には出さず礼を言って、彼は教えられた場所を目指した。

それにリーインが気づいたのは、一旦宿に戻った後、今朝持っていけなかった『土産』を買うために街に出たときのことだった。

約しい暮らしぶりながら、実は結構あの老人は味にうるさいのだ。適当なものを持って行っては、礼どころか文句を言われかねない。

気分転換も兼ねての外出だったわけだが……今朝覚えたものとは別の、やはり覚えのある気

配を感じたリーインは、思わず周囲を見回した。
（選の巫女!?　まさか近くにいるのか!?）
だとしたら、絶対に顔を合わさないようにしないと――と、思った彼は正しくナルレイシアの資質を見抜いていると言えよう。
だから、特徴的な金の髪が視界に入らないことに、心底ほっと息をついた彼は、しかしその気配を放つのが彼女自身ではないことにすぐに気づいた。
非常に強いが、それは残り香のようなものだった――纏っているのは、ひとりの青年である。
栗色のさらさらの髪に、緑味の強い榛の瞳を持つ青年の顔を、リーインは複雑な気分で見つめた。
（捜し人が見つかったのはめでたいが……なーんで選の巫女が関わっちゃってるんだかねえ……）
一瞬、触らぬ神に祟りなし――と思わないでもなかったが、今回ばかりはそうも言っていられない。
リーイン自身、命がかかっている。
それに、と思う。

(大丈夫のはずだ……選の巫女といったって、一年前に役目は終えているはずだ……あのときみたいな騒ぎは起こらない……はず)

必死に自分に言い聞かせ、彼は深く息を吸い込んだ。

見つけた以上、やるべきことは決まっている。

捜し人の名を、舌先で転がすようにつぶやいた。

「……ウォルセン・ディーシア・オルス・マルシアス」

独特な韻をこめたその声は、空気を震わせることなく、不可視の網を作り上げる。

(悪いな……これも巡り合わせだ)

細密画に描かれていたころより、少しだけ大人びた青年に胸中で詫びながら、彼は気取られないよう、ゆっくりと後をつけはじめた。

獲物が網に気づくまで、あとほんの少し——気づいたとき、青年は自らが逃れられないことを知るのだ……。

ディエーン南部最大の街――アシャス。
高く頑丈な街壁に囲まれた古アシャスと呼ばれる地区と、その壁の外に広がった新アシャスと呼ばれる地区とに呼び分けられてはいるが、それは単なる便宜上のこと――そこにさしたる意味はない。
と、そう信じる住民が大半を占めるようになって久しい大都市。
堅固な守りで知られた城塞都市であった時代は、すでに過去となった古き街――。
その中心部にそびえる厳めしい外観を誇る領主の居城――黒鷲城も、かつてとは違い、異様なまでに周囲を圧する空気を纏ってはいない。
だが、それはあくまで傍目だけのことだ。
その奥の事情を知る者たちの認識は違う。
穏やかな街の空気はあくまでも擬態――彼らにとって、アシャスは今も、いつ戦いが起こっても対応できる鉄壁の城なのだ。

黒鷲城の最奥――厳重に隠された小さな部屋に、テーブルを挟んでひと組の男女が向かい合っていた。

ひとりは濃褐色の髪に翡翠の瞳を持つ二十歳前後の青年。

いまひとりは、銀の髪の若い女性である。目元を薄い紗で覆っているため、その瞳の色は窺えない。

女性の前には、幾枚かの絵札が並べられている。

その札にそっと触れながら、女性がささやくように、告げた。

「……近付いております。ほどなく手が届きましょう」

女性の言葉に、青年は優美な口元を笑みに綻ばせた。

翡翠の双眸が、嬉しげに細められる。

その脳裏に浮かぶのは、一年前に別れたきりの親友の顔――緑味の強い榛の瞳に豊かな感情の色をたたえるひとつ年下の友人にして義弟。

『アッシュ』

そう自分を呼ぶ彼の声が、どれほどこの心を温めてくれたか、きっと彼自身は知らない。

彼の自分に向けてくれる全幅の信頼が、どれほどの喜びを胸にもたらしたのかも。
彼が自ら離れた理由は知っている。
だが、それは自分の望むところではなかった。
それでも一年待ったのは、準備に多少の時間を要したせいだ。
しかし、それもすでに整った。
（だから……ディー）
大切な友に、彼――アシュアイード・ヴィーオラ・オルス・マルシアスは、声には出さずに呼びかける。
「もう、充分に外の世界は見ただろう……？」
そろそろ、帰っておいで――。
やさしい、やさしすぎる声で、今はまだそばにいない友に向かって、彼はそうささやきかけた――。

# あとがき

スギ花粉舞い散る季節、皆さんいかがお過ごしでしょうか。

去年に比べ三倍といわれるスギ花粉に大いに泣かされております前田珠子です。

あまり間を置かずに出せそうでほっとしつつ、『天を支える者』緑の章第二巻『緑の糸をたどって』をお届けします。

前回、逃避行を始めたナルレイシアとウォルセンですが、逃げに逃げに逃げ回ってます。まさかここまで逃げるとは、作者にも予想外でした（確かにプロット段階で、逃げるシーン多いかな、とは思ってましたが）。

おかげで今回、ほかのひとたちの登場場面が少ないです。いや、さすがに二回は登場しましたけど……黒髪のお小言公爵は、ほんとにお小言と文句しか口にしていないという……少々申し訳ない展開になってしまいました。

おかしい。彼は悲しい過去を背負う美貌の青年公爵――のはずだったのに。設定では確かに

そのはずだったのに！　このまま行くと小姑化してしまいそう……うむむ、まずいです。軌道修正をはからなくては（でもお小言公爵とナルレイシアの掛け合いは書いてて楽しい）。

悲しいと言えば……前回「笑える哀しいひと」だったウォルセンですが、今回笑えるだけではないひとを目指しましたがいかがでしょうか。実はそれなりに修羅場慣れしていて、頼れるひとではあるはずなのですが……なぜかナルレイシアが一緒だと、彼女に振り回される運命にあるようです。

第一巻では回想シーンにしか登場しなかった彼の親友も、今回少しだけですけど登場させました。担当さん曰く「ウォルセン君の回想のなかでは真っ白なイメージだったんですが……なんだか黒くありませんか？」……確かに真っ白ではありませんね（笑）。

このふたりは緑の章における影の主役とも言える人物なので、テンポ良く話を進める一方でしっかり描きたいと思ってます。

とは言え、四巻構成予定の二巻が終わった時点で、ようやくふたりのフルネームが出るというのは……。

新たなタイトルを考えずにすむよう、頑張ってこれからの展開を煮詰めるつもりです。

次巻で幼なじみ再会――は決定事項です。ご期待ください。

ああ、早急に第三巻のプロットに取りかからなければ。去年まで症状が比較的軽微だったた

め、花粉症の脅威を甘く見てました。ティッシュが手放せないことはともかく、あれほど頭が働かなくなるものだとは！　花粉が猛威を揮うのはこれからだというのに……少々不安を覚えております。

えー、先の不安を並べても仕方ないので話題転換。

近況です。

猫の額菜園における野菜たちの状況はさほど変化が見られません。ほうれん草を日々美味しくいただいているのを除けば、ネギの直径が二、三ミリになったことと、ニンニクの茎がそれなりに太くなったことぐらい。

それでというわけでもないのですが、クリスマスローズを買いました。

清楚な白い一重の花が咲く、ニゲルという品種です。

真っ白な花に一目惚れして、家に連れて帰ったわけですが、勝手に「白雪さん」と名付けて呼んでいたら、某『趣○の園芸』で、ニゲルの子供品種に『白雪』というのがあると知り、驚かされました。

取りあえず、この夏「白雪さん」をいかに守るかが問題です。原産地は夏は乾燥するとのこと、高温多湿な日本でどうやって越夏させるか……無事に守りきることができたら、今度の冬にまた新しい子を迎えたいです。

ゆくゆくは交配させた種から育てたいものですが、花を咲かせるまで十一年かかったという話を読んだりすると、せっかちな自分には向かないかな、とか思います。

そろそろ、結びとまいります。

今回も挿絵の明咲トウルさまを含めた関係各所のみなさまに、大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

次巻のタイトルは『緑蘿の檻に囚われ』か『緑蘿の枷に繋がれ』になります。タイトル候補がふたつあるのはどちらのタイトルがよりしっくりくる展開になるのか、まだ判明していないせいです。すみません。早急に固めます。

次巻はちょっと時間経過のある流れにしたいと思ってます（ナルレイシアの怪我も回復させたいところですし）。

それでは、またお会いできることを願って――。

平成二十年　春

前田　珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。


へたれじゃない！

**まえだ・たまこ**

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『空の呪縛』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



天を支える者
緑の糸をたどって

COBALT-SERIES

2008年4月10日　第1刷発行
2008年7月14日　第2刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　礒田憲治
発行所　株式会社集英社

〒101－8050
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
電話　東京（3230）6268（編集部）
（3230）6393（販売部）
（3230）6080（読者係）

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2008　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN978-4-08-601149-5 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

本好き少女の波乱万丈ファンタジー！

# 前田珠子 〈天を支える者〉シリーズ

イラスト／明咲トウル



天を支える者

天を支える者2

天を支える者3

天を支える者4

天を支える者 古懇唄

天を支える者 古懇唄2

天を支える者 古懇唄3

天を支える者 古懇唄4

天を支える者 古懇唄5



天を支える者 罠は、蜜の味

天を支える者 緑風に誘われ

〈好評発売中〉 コバルト文庫

二度はないと誓った、この愛が痛い。

前田珠子 〈空の呪縛〉シリーズ

イラスト／明咲トウル

# 空の呪縛

『針の森』に住む美しい女柱神フィオルシェーナは、恋の誘いを頑なに断り続けていた。それは、過去の過ちを繰り返さないため…。恋獄の楔に絡めとられた女神の愛の物語！



柱神フィオルシェーナの前に、かつての恋人の生まれ変わり、ファナルシーズが現れた。運命が、二人をあざ笑う。

空の呪縛

月の堕ちるとき

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。

# 前田珠子

〈聖石の使徒〉シリーズ

イラスト／山本鳥尾





聖石の使徒
其は焔をまとう者

聖石の使徒
其は力を放つ者

聖石の使徒
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
揺籃の瞳

聖石の使徒
蒼の組木箱

聖石の使徒
狩人の爪

〈好評発売中〉 コバルト文庫

美少年コンビが暗躍する魔性を斬る!

前田珠子 〈魅魍暗躍譚〉シリーズ

イラスト／田村由美

魅魍暗躍譚

碧眼の少年(前編)(後編)

髪と瞳の色を奪った魔性を探す甲斐。途中、行き倒れの志摩を助けたことから、没落した名家の当主・隠岐と知り合って!?



月乃守家の姫君・遠江(とおとうみ)は美少女だが相当の猫かぶり。偶然異母兄の甲斐と再会を果たすが、魔性の陰謀が彼女に迫り…!?

魅魍暗躍譚

月読見の乙女(前編)(後編)

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ！

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／廣門 潤

漆黒の魔性
白焔の罠
柘榴の影
紫紺の糸（前編）（後編）
翡翠の夢1～5
鬱金の暁闇1・2
女妖の街 破妖の剣 外伝①
ささやきの行方 破妖の剣 外伝②
忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③
時の螺旋 破妖の剣 外伝④
魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤
呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥



〈好評発売中〉 コバルト文庫

何があっても、私は負けない！

# 風の王国

嵐の夜（上）

毛利志生子
イラスト／増田メグミ



最愛の夫であるリジムを失い、翠蘭は夢の中に彼の面影を求めて城内をさまよう…。気丈にふるまおうとするが、不審な噂が流れて…。

〈風の王国〉シリーズ・好評既刊

風の王国
風の王国 天の玉座
風の王国 女王の谷
風の王国 竜の棲む淵
風の王国 月神の爪
風の王国 河辺情話
風の王国 朱玉翠華伝
風の王国 白容の毒
風の王国 臥虎の森
風の王国 花陰の鳥
風の王国 波斯の姫君
風の王国 初冬の宴
風の王国 金の鈴

〈好評発売中〉 コバルト文庫

何でお兄ちゃんがここにいるの!?

# 乙女は龍を駆る!

榎木洋子
イラスト／牧あさか



津波から人々を救ったのに、理花たちは投獄されてしまう。そんな時、夕樹の伯父アシュの思惑で理花の兄も異世界に呼び出され…?

〈乙女は龍を導く！〉シリーズ・好評既刊

乙女は龍を導く！
乙女は龍を目指す！
乙女は龍を結ぶ！
乙女は龍を抱く！

〈好評発売中〉 コバルト文庫

―もう誰も奪わせない。

シュバルツ・ヘルツ―黒い心臓―

# 神々の脈拍 vital.A

## 桑原水菜

イラスト／夢花李



神の岩に呑まれた奏を救おうとして、呪いを受けたケヴァン。奏はケヴァンを助けるため、湖底都市ラムリアへと導かれるが…？

―〈シュバルツ・ヘルツ―黒い心臓―〉シリーズ・好評既刊―

**シュバルツ・ヘルツ**―黒い心臓―
**ワルキューレの雷騎行**
**アリアドネの糸車**
**シヴァの踊る森**
**燃える湖底のラム**（前編）（後編）
**シュバルツ・ヘルツ ゲスタァン**




シリーズ好評発売中!

**高校デビュー**

**高校デビュー**
ークリスマス大作戦!編ー

**高校デビュー**
ー好きになっちゃいけないひと!編ー

**高校デビュー**
ー恋の相談にご用心!編ー

倉本由布 原作 河原和音

コバルト文庫

〈好評発売中〉 コバルト文庫

新しい仕事は住み込み家政婦。
待ち受けるのはガンコな「家」!?

# 精霊の島のシレネ

## 上手な家の手なずけ方

崎谷真琴
イラスト／沙月ゆう



天涯孤独の少女シレネは、知人の紹介で精霊の森の「エンゴラロッソの家」で働くことになる。しかし、家に着くなり家主のロッソに「帰れ、さもなくば追い出す」と言われて…?

コバルト文庫 雑誌Cobalt

# 「ノベル大賞」「ロマン大賞」

## 募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の新しい書き手の方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人賞の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、自分の才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!

〈大賞入選作〉
**正賞の楯と副賞100万円**(税込)

〈佳作入選作〉
**正賞の楯と副賞50万円**(税込)

### ノベル大賞

**【応募原稿枚数】** 400字詰め縦書き原稿用紙95～105枚。
**【締切】** 毎年7月10日(当日消印有効)
**【応募資格】** 男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
**【入選発表】** 締切後の隔月刊誌Cobalt1月号誌上(および12月刊の文庫のチラシ紙上)。大賞入選作も同誌上に掲載。
**【原稿宛先】** 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10(株)集英社
コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる「ノベル大賞・読者大賞」(大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円)の対象になります。

### ロマン大賞

**【応募原稿枚数】** 400字詰め縦書き原稿用紙250～350枚。
**【締切】** 毎年1月10日(当日消印有効)
**【応募資格】** 男女・年齢・プロ・アマを問いません。
**【入選発表】** 締切後の隔月刊誌Cobalt9月号誌上(および8月刊の文庫のチラシ紙上)。大賞入選作はコバルト文庫で出版(その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします)。
**【原稿宛先】** 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10(株)集英社
コバルト編集部「ロマン大賞」係

雑誌Cobaltの発売日が変わります。応募に関する詳しい要項は発売中の6月号、以降9月・11月・1月・3月・5月・7月号(偶数月1日発売)をごらんください。

9784086011495

ISBN978-4-08-601149-5

C0193 ¥438E

1920193004380

定価 本体438円＋税



コバルト文庫